



戊戌日記

明治三十年
一月

巳號

早稲田大学図書館
文書27
A95
2



本邦軍艦新製

一 茅 戰艦 甲 鉄 艦 三十九年出楢

一 富士 艦

壹萬五千噸

三十九年七月廿四日回航

英國テイクハム送艦場
海軍大臣三浦即回航表

一 八島 艦

壹萬五千噸

三十九年七月廿四日回航

英國海軍大臣有馬新一回航表

一 敷島 艦

壹萬五千噸

三十九年七月廿四日回航

英國海軍大臣有馬新一回航表

一 朝日 艦

壹萬五千噸

三十九年七月廿四日回航

英國海軍大臣有馬新一回航表

一 無名

無名

三十九年七月廿四日回航

英國海軍大臣有馬新一回航表

一 等 巡洋艦 裝甲艦

一 淺間 艦

九千噸

三十九年七月廿四日回航

英國海軍大臣有馬新一回航表

富士号
大野砲四門
長四百六尺六寸
三噸吃水
明治廿九年九月
追水式
三十九年三月
三十九年六月
三十九年十月

中興吉田

一 常磐艦

九千石

三十五年三月進水
三十五年六月竣工

英國 ニーロス、石炭占

一 吾妻艦

九千石

英國 フラマ

一 八雲艦

九千石

獨逸

以上十二艘

一 千歲艦

四千石

三十二年三月
回航直航

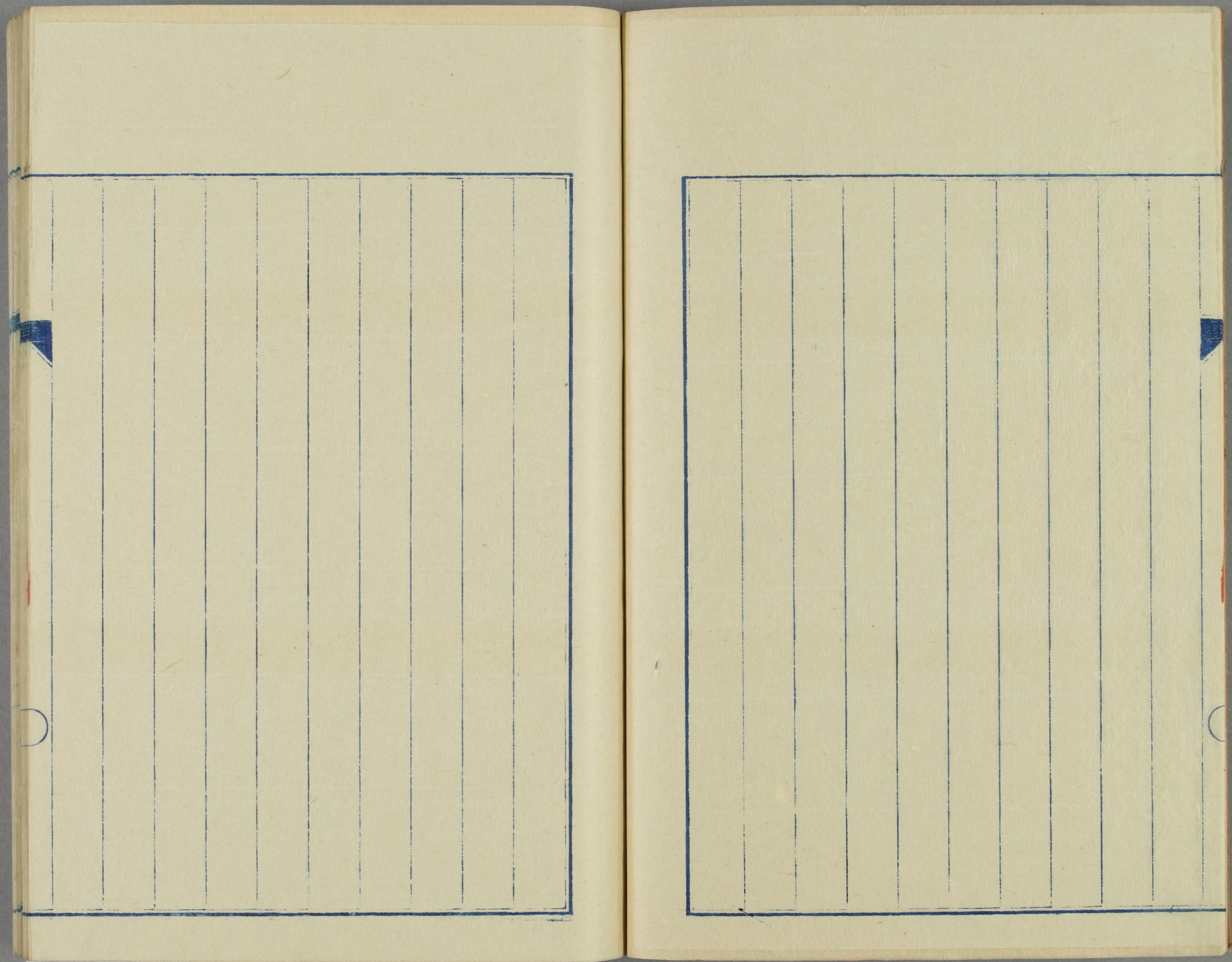
米國

一 笠置艦

四千石

〃〃〃

米國



三十年九月二日

露佛同盟

英國新聞云露佛同盟之世界之平和一層
堅固云々

獨乙皇帝白皇后露國行八月十日倫敦電報

露獨而帝之對治中世界之平和妨々甚不
子露國之對治中第一歐洲他之平和對治
吉兆云々云々

英國如立

クイーン白存進歩論英西之商業最盛

ヨ排擠 きんし

三十年

十月十九日時事新報東京ロンドン電報

露兵出發 倫敦十月十七

露國義勇艦隊汽船と満洲鉄道工事保衛
ノ命を以てる多數の兵を以てオテッサと出發
す

楊乙村清運動 口上

楊乙、新聞紙の海軍根據地としてキア膠州子ヨ一の

江久占領と政府は勸告し居り

タイスは清國を對し楊乙の活動を諷刺し英
國亦常々同の動作を試み(きんし)と云へり

北京時報 十月十九日 特派員 杉義太郎

獨乙軍艦の示威運動

靜穩たる青天、俄然迅雷ノ落不レシム如ク世人ノ耳目ヲ驚破
シタル福見之ヲ教師我殺メ爾レ同國軍艦ノ行動ハ既ニ電
報ニ報テ如ク其事ノ起因ハ山東省曹州府鉅野縣ニテ
獨逸宣教師ノルナヤヌスノ面々暴民ノ怒ヲ命テ在レド
是唯同國ノ依テ以テ口實ニシタルニ過キテ深ク其根本ト叩ケハ遼
東干渉以來同國ノ無念遣テカク何事カ事機ヲレレシト待
テ構ヘタル疑フヘララズ露國ノ北部ニ於テ佛國ノ南部ニ於テ其
鐵道ニノ利益ヲ得ルニ反シ同國ノ之カ為ニ徒ニ我ノ日本能

ヲ買ヒシ止リテ更ニ報酬ヲ得ル所ナク稍ニ報酬ノキタルモノトシテハ 僅

漢口天津ノ吾当地ヲ得タルノミ去レハ本國政府モ是レ全ク公使
ノ無能カト為シ然レ之ヲ更任スルニ至リシガ現任ヘンキー氏モ着任後
久シク格別ノ事ナカリシガ免角曩海軍根據地問題ヲ提出シ是
レホ素氣ナリ清廷ノ拒絶スル所ナリシバ同公使モ躍氣ナリ爾來其
清國對シ舉動ニ來着當時より大ニ趣ヲ變テ來リ宮中ニ於テ敬
信大臣ノ臂打ヲ喰ヒ總理衙門ヲ窘シテ或ハ黃遵憲ノ如キ人
物ヲ公使トシ事ニ向テ異議ヲ申シ込ムナト一レシテ其心中ノ不平鬱積
シ表スルニミシラレハ其外交政界ニ一挙キ一投足悉ク佛國公使
セテ一氏ノ故智ニ倣ヒテ今ヤ總理衙門ヲ怒付トナリ居タリシガ

過日公使、自ら漢口居留地視察、為、南行、同地、於、其、隨
員、無、賴、漢、為、亂、暴、せ、し、之、張、之、洞、敵、談、之、容易、之、圖
キ、入、リ、シ、モ、遂、武、昌、砲、台、ニ、一、夜、ノ、大、砲、ヲ、發、シ、謝、罪、ノ、意、表、シ
事、漸、リ、落、着、シ、リ、未、夕、雨、ニ、日、モ、終、リ、テ、又、山東、省、殺、害、事、件
ヲ、見、リ、事、々、心、中、激、怒、推、シ、知、ハ、リ、殊、時、機、ヲ、待、テ、構、ヘ、居、ル、事、
モ、ソ、レ、バ、終、ニ、斯、レ、過、激、キ、限、及、シ、容易、ニ、サ、ル、敵、談、ヲ、清、政、府、ニ、試、シ、若
レ、リ、ト、云、フ、在、ハ、バ、昨、日、如、キ、恭、慶、面、親、王、及、翁、同、欽、本、鴻、臬、張、蔭
桓、榮、祿、崇、禮、徐、應、騷、等、ノ、各、大、臣、朝、東、浙、以、集、合、シ、テ、評
議、ヲ、凝、シ、シ、様、子、ナ、リ、今、夕、獨、シ、東、洋、艦、隊、膠、州、灣、附、近、ニ、集、合
シ、テ、示、威、ノ、運、動、ヲ、為、セ、リ、テ、僧、侶、ニ、人、ノ、殺、害、ヲ、真、土、地、要求、ハ、信、セ、ラ

レ、ル、事、々、シ、シ、モ、前、後、ノ、事、情、ヲ、細、考、ス、者、通、償、金、位、ニ、ハ、容易、ニ、許、サ、レ、ル、所
以、知、ル、難、カ、ス、事、ノ、成、リ、行、キ、如、何、ニ、シ、テ、程、度、ニ、至、ル、ヤ、知、ラ、レ、バ、若、シ、日、耳
曼、政、府、ニ、シ、テ、僧、侶、ノ、首、一、箇、ニ、廿、國、ヲ、償、高、リ、見、積、ル、ト、モ、我、國、ニ、シ、テ、ハ、萬、年
噸、ノ、海、軍、力、ヲ、以、テ、廢、ス、東、洋、手、和、為、シ、畫、カ、ス、ベ、キ、決、心、ヲ、ラ、ン、コ、ト、シ、テ、モ、ナ、リ

華北京特報 十月廿日 北風 杉葉大

膠州灣右領事事件

同事件、火、事、益、高、キ、昨、夕、ノ、風、雪、如、何、ニ、シ、テ、變、候、ヲ、ロ、シ、ヤ、モ
知、ル、ハ、カ、ラ、ス、實、ニ、近、來、ノ、出、來、事、々、言、ハ、レ、シ、獨、シ、ハ、既、報、如、ク、大、キ、事、ヲ、所、ア、ル、モ、
如、ク、突、然、兵、艦、二、艘、ヲ、膠、州、灣、ニ、派、遣、シ、テ、先、ツ、短、艇、ヲ、武、官、ヲ、上、陸、セ、シ、
該、地、防、營、清、國、兵、十、八、時、間、内、退、去、シ、其、兵、營、ヲ、引
渡、ス、ル、事、日、ト、ホ、ヘ、右、シ、昔、シ、セ、ハ、直、ニ、兵、艦、ヲ、砲、擊、ス、ル、傳、ハ、レ、シ、該
營、總、兵、章、高、元、等、ハ、已、ニ、同、所、ヲ、退、却、シ、タ、獨、シ、テ、木、兵、入、リ、代
リ、テ、真、營、所、ニ、進、入、セ、シ、其、上、陸、兵、十、數、ニ、百、人、ナ、リ、尤、モ、同、公
使、ヲ、載、シ、天津、ニ、着、セ、シ、一、隻、ノ、兵、艦、モ、加、ハ、リ、シ、テ、云、フ、免、南、台、面

事ハ唐突ニ出テ未ク清政府ヘ何等ノ議ヲモ提出セサル不慮
ニ先ツ土地ヲ占領スルヤドノ實ニ暴慢無礼ノ行為ニ任ズ
振舞ハ云フノ外ヤキニ然レモ歐羅巴對亞細亞政略ノ往々此
ノ如キモノニテ此邊ノ意味ハ本邦人ノ深ク味フヘキ所ナリ
獨ニ公使ハ一昨日に至リテ漢口ヨリ觀察歸京シテ明日總理衙
門ノ談判ヲ前ノ豫定トシ此度ノ行為ニ就テ各國使臣モ表
面上一意向ハ反對ノ如クナレモ今日未ク何レモ確報ニ能ハス唯
我輩ノ大ニ考レタル傷ヒガ實ニ使臣等ノ如何ニ口實ヲ
以テ土地ヲ要求スルヤ知ラシク然レモ在價金ヲ出サシメ地方官等ヲ
四討スガ如キ申込ハ正當トモ左計ノ要求ニ軍艦ヲ以テ膠州港
ヲ占領スベシト思ハス斯レ午後二時或ハ廈門ノ金門島福州ノ
三沙澳等ヲ要求スルモ非レバ免レ南斯ノ要求ノ振舞ハ實ニ
東洋ノ平和ヲ破ルモノニシテ清國トテモモサカレ黙止スベキト非レバ
斷然トシテ其要求ヲ拒絕スルノ決心ニテモ現ニ本邦海軍ガ
其公使ト會見シ其意ヲ示シテ清國ノ法ハ自カニ及ビ

シモノト非シテ他ト大ニ依頼スル所ナルナリ一昨日モ清國政府ヨリ露國
公使ヲ總理衙門ニ招キテ久シク秘密ノ會議ヲ為セル様ナリ
或ハ獨ニ舉動餘リ大膽ニシテ更ニ忌憚ル所ナリ露國向
帝會合ノ時何レ細細ク談ニテ已ニ相談ノ出来居リクモ非片
ト疑フ向キモ露國公使ハ其當キ清國大臣ト相談シ南議ヲ疑ヒ
ルモノ、如シ李鴻章氏ノ獨逸公使ト親密ニ英國公使トグットナルト向
ヒ人ヲ以テ仲裁ノ事ヲ依頼セシ同公使ハ承諾セサレシモ是レ或ハ露
佛ノ旗色尚鮮明セカレ迷ヒモノナラシコトク我日本モ清國對
シテ誠意減衰實力カスアラシク清國大臣等モ稍々日本ノ結
ノ利益アルヲ知リシ向キモ少カラザルヤ固キ及ビニミナラズ西國ノ益
親近ニハ實ハ今日ヲ以テ好機ナリトモ況ニ遼東ヲ涉ノ獨逸ガ
其清國對シテ舉動ノ東洋平和ヲ破ル於テヤ況ニ獨逸ノ南方
ノ海軍根據地ヲ有スル事、我國將來ノ利益ト大關係ヲ
有スルヲ我輩ハ日本政府ガ此時當リ斷言シ法心ヲ不サンナリ

希切に堪へたり
伯林駐劄の清國公使許景澄氏、今度の事件、孰も何れも本國政府の意向を獨り獨り申す所あり、且つ自政府の方面、事一切北京駐在の公使の全權を委任せしめ、萬事を處理せしむる、前にも商議の必要あり、拒絶せしむるべし

二十一年
十二月一日上海午後五時、早稲十時、早稲十時、本社

佛露獨三国の暴行

東洋大禍起の勃發

信憑なき助の一説、佛露及獨、三国共同の土地を取らん、露の朝鮮及び北清獨、山東佛、臺灣及福建ヲ得ん、皆ナリト云ヘリ

事跡の重大ニテ、殆んど居るべからざる、感あり、本誌尚ヤ分り取調ヘテ

清英公使交涉之要

明治三十年三月五日、英領事官舎に於て、
伯面會談話、英領事官舎に於て、
着京不日、英領事官舎に於て、
事件之就、我法領事官舎に於て、
鴻章之使、我法領事官舎に於て、
周維之使、我法領事官舎に於て、
石本之使、我法領事官舎に於て、
主論、我法領事官舎に於て、
以下、我法領事官舎に於て、

二十一日曜輝山内相高田副花子行より書
心より問答を承りたる事あり

有漢存の郊外に遊樂する日如天氣より物
ありて中にもありて中にもありて中にもあり
辰より出掛りて一層の道より行くと
要らざる話を承りてお茶に坐りて
候り上程お役学を承り

去りて廿日 賀之紀

和東より先生に傳へ

此方此方より高田副花子行の書と
賀之紀

此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて

三月下旬に於て極力院議長黒田伯々
此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて

此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて
此方此方話清菜の集りて

我朝与海峽諸國同商海之利其地
之險亦其大所深事之者之始也
之通亦其任我亦樂納之也其
有少以在在教具

十二月廿九日

英國公使

五ノルカニトサナウ

官島誠市做

壬子年一月者英國公使、新年賀状、
礼を以て

御幼新禧恭賀、益々好年、
以て

成欣祝、此年、
事、
与相、
祝儀、
方、
時、

明治廿一年一月者

官島誠市做

英國公使

七日午後、
里、
此際内

明治三十七年戊辰日記

一月元日曇天冬寒驟淡 華無皇太后忌

崩御一周年之忌也 都河吹雪有冬新年

之景也 新年未成可 臨與賀友絶非

早起修前玉川新水之流 新年 橋先之掃除

后年之塵魔之洗 后年還曆

上段庭敷友懐席 田舎者包年創法也張

繪和事煩之牙痛解對的也作

甲子周心尚重 新年對酒与果同梅花

未好春先初笑我 依然微帶紅

可市昨夜越年對酌之趣后日出改之也
急且喫明日由故之改之決す
應古初身之對宅之酒多之出
大八金張之教師事矣

二日也

可市后日大坂會任身之極勢又之廣島出農
之使者之七國授也

對宅之家族百酒食おとく来、于好話
守之出立之兄弟之對揚也也

宿對宅 應以之山下街成街也右大平六也

米。家人一日也年正十二山三十也

三

可市昨夜之出立之極勢之改之一年也

物宅佛三出泊之出張之家人深之惜別

湯高忠世兼昨夜之米深之不足氣物

傳之膳米一八二十所之也 耽望對食

四也

本為地代收納之米成辰之其は使サトウ流之也

晚方日存櫛之買物之也 一也、重之也、車掛可

皮手袋之葉心使之唯身兼兼之若也 雁

二羽書多読のりゝお水の想の物電

也。

清表新年毎書

英公使ハハハハ新年祝賀ニお雁を對上候ハ活筆

也。君少豫ニ奉賀御来ニお礼を承可。

年内島津公智忠義書方團長ニ仰出市

川村伯業公掛ハ左鹿兒島仍勿出展也。

吊詞物状ハ世々

可市ハ大坂ニ中引着只今電報ハ新廣島

出立ハ下也。

午後勝伯ハ彷彿發以世談ハ。穂木嶋北ハ

着備来也。如以也。音信不道

日本揚々備來表ハ六枚持来十田ハ海軍

歸字抄用也。

六日

終ハ午中。可市ハ曾自ニ表ハ市ハ市初

大坂ニ着。指渡ニ下車去即所ニ菓子ニ買

心持来也。

大正海海屋ニ持来。接和船修儀

也。

岩佐純素地代坊平作お供
向島石花園主素

富士見町石見軒の友才屋より行。夜宿新宅
十二日 日小卯

雨降雨 愚田信吾に礼。年々日、伊東男爵
農商務大臣 就任を悦ぶ多幸なり

晩方夕花修三長浦より均す也
月夕 初山安否并 浪濤を 振返る身大八太佛

長政も来り、劉雨田贈付の 銅鳥 鴨を以て装
飾新宅 今より 振先所地代坊一 幸す 其新装

十七

湖雨少なり 午前 赤浦来

古殿より地代坊様へ手紙あり。一人不暇なり

伊藤經理并少藏相、悦ぶ首座へ来り

午收勝伯と訪曰く昔の程より物より大衰

弱と極めたる事有り。勝伯と暫く話し均す

新宅夜食 有公事

十八

陰寒 午收税所、初氣と信鴨一隻持来り

車より初坊より有方言、鹿見島へ行く事あり

河内屋形移金の難食の行 其山内和久良
湯の湯内宅

長濱記を接する

十九日 午二日

晴 朝風 午前書付 数書取

番所抄 留年終末

御風 松素 大風 捲屋

古為千生 前年地租 百二十五圓 收納之為

手取 抄了 概算地代場 達了 十九日 若以

二十日

晴 朝結氷 寒氣 早曇 月日 大獲入

可立 後 湯内宅 十二日 其 主 相違了

保科 下 山代 山内 結年 為 事

昨方 稲生 在 之 鶴 卯 二十箇 次 味 品 持 系

黒田 佐 訴 對 酌 緩 談 話 若 田 成 之 祀

走妙

廿日

晴 兼 子 琴 師 之 能 皆 人 之 甚 日 伴 羽

田 磯 白 水 行

大 大 師 河 内 行 之 事 皆

唐廷法天師之緣起之後也

歲入唐

百餘山之安也六

十 歲感于

林二日土曜乙酉 戊戌正月朔日

天晴之風 長間書棚整頓

舊曆新年 清國公使陸廣及書記

官至之頃 頃刻之利 授了 大八年庚寅

文藏京之御來甘之長浦 宿行鏡梳

二年 宿辰新定 始後

廿三日曜 初雪

朝之雨在來雪

清公使返唐之利之賜來

大八金國謹張延壽二教所 禮法之報

之續初雪 初來雨降雪

初之始也 叩門之始也 大八雪中 門外之出

近傍之息神人 初之始也 門外之出

昔

昔

終之雨降 雪降其多計之終之不出門

園林初雪 皇矣之有飛也

此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

廿五日

父老先の業し之者信定めて長浦にありて
却て其氣製其以車多し其郎と長浦
也一初輝き身は種々其考と身は廿日
日身は身中子花より其考と身は廿日
賜す又理也 上自長浦より書来
し。新年初日皆心より其考と身は廿日
此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

又と銀正宗の業し大八元三と初より依おせ
此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

此乃山宮威之注を七割る細郡長官居る者
賜す

且身深部徑裁之辭進ヲ祝し元舞下如
出才川上所訪シハリヤ節リ之口且身牌之
芳節道旨遊之初氣之繼也ハ
晚方おハ代心青海六身候之身法女来
晚寝之辭ナ

廿八日 正月八日卯

朝鴨之雲云 お徳事、長政市、張唐之世
之層段有夫ハ短弁之改リトナリ
片ニ新身人ハ切服身以ハ長政之宗治ニ
萬段の梅ハ破ル早也一身分ハ與人對的

お徳夜十字均、俄然大風吹来

午後之頃お徳産氣暫停ナリ、自身来
ノ者、お徳産氣之世ハ之頃孝老ヲ出產誠
也、お徳今也ナリ、阿茶ト名有ク

廿九日 土曜

昨夜之頃、起ル、大睡ニ、風邪氣ナリ

馬科、電報ナリ、お徳之報ナリ

一過夜ハ、宅地荒レ、收納

お徳、手取羽留、情定。晚方阿鶴悦、喜鶴
卯二十廿日、お徳定、お徳泊

新風多涼中二人來新定指末の境長
英皇皇太后御意申遷往門脇通と水撒
改す

晩方父老手物少く長政之損と對候
とて之報持来可申す手書申

三

好晴天氣靜穩輕霽霽可

可而羽織新製改し等々時斗新小包等

徳倉の物状を尋り 地方神田多所の密

相之業若キと買の海

四

出産七日の産波女と指し祝儀と也

芳川殿正の内務大臣之懐胎三浦女物

不在。山林の時斗之屋敷之行

本夜所海水浴 精善新之洋儀改す

五日 曇り

可申大坂より出立来。昨申通信省より八級傳

之辭居之等々申来

山川浩死者報お来。 本坂中川男曾来

杉原謙来

西京より函文を奉り大八面會家庭に苦情
を先く酒飲る年一夜九時極満の時

六日晴日曜

午前長政来、昨夕坪井海軍中將を葬式
盛式あり、徳永来、孝丸を所送る

山川浩宅、弟同、常野鶴理發

沙草公園、御廻、双燈、荇澤長政、對

飢勢老、居る

七月、朝雨午前十時迄あり、晴、夜宿新庄

根柢より懸念を乞ふ

午後一時山川男爵浩、葬式、臨む、五十四歳、
一、翌日、青山、埋葬あり

今日、晴、荒所地面より、一因、地代、難、難、未

八日、正月十六

大八面田、銀、り、借、用、屋、建、立、書、規、を、記、し、可、し、
あり、山川、り、屋、敷、を、河、記、也、未

徳女来、午、故、松、大、介、高、橋、あり、鴨、官、来、り

相食、在、宅

己巳二月中、封土、奉、還、し、建、台、と、喚、方、り、看、り、松
法、事、書、り、了

九日晴

午前掃除理髪思ひや三點鐘に暫く

藤野房に命翻話の中東戦紀本末を讀む

當分よりお歸おれど来り宿りて汁を吞下

子位にお密相と欲す

十日晴曇

午前子叔来り午後午後降雪非常之大雪

と成

佐理任番より佳若来り午後午後大雪格と多し

和里田伯より雪年五枚使書状持来り

拜読久敷お得お青り交既立書者も色

昨片持對面友刻下登り北健江お涉

を事あかり陸に東培養後長と平

和梅間、東洋と不時候、感心せし

得若女御来りしを承培養長適當

昔、昨日、名跡惜しげと羨感

控老獨眼多し何うな思ひし言

言と氣味、白雲、花を對し中し不

不水濟殊と影来り雪を伴し情と既片

頻り物来り供身思良か何と亦来

静以爲居高田原を以て先臨おけり
敷哉万々若哉平和梅の口々々々
たふらぬ人々謝るたらん唯々相心
後世に母の行はる

三光年二月十五日 山草

美島原身先達

二伸ひまの乱筆抄又年々之書教
為の内実の抄を施り申す徳也
後世に母の行はる

叔深初来洋流初得我懐上修睦志任
之面有之仰一軒故所より至居を以り年
午後四時大雪之日と三年所修睦志任
不快中より着衣婦之由に因修睦志任
翁白く片日東洋最可畏之海也初時及法
不々之海也懐柔也人心の海也傾向
將來日本に事ある不測今之時法必を愛
了昂に得策あり仍も今年月日償金之後
了身賦切限延長と法也人心の海也
伊藤經理の誤り其板を初めし我々實際

我願所後の積るの如く丹り限一初て教習し
堂金を收取の計西熟成り其公明の儀
事者有る事とて又其臨候話も不
去成爲之熱慮之べしと云々至爲日く即者
今年密艦之長崎渡洋一其長崎の儀
火災之儀一其公明の儀一其公明の儀
日初の儀一其公明の儀一其公明の儀
の如く及之人民の儀一其公明の儀
此七者臣等之儀一其公明の儀一其公明の儀
上は重英心と信し之儀一其公明の儀一其公明の儀

之因果如何とて多事抱杞憂哉
依理多と悦び。西京固多と悦び
其方信多と悦び。田中光親空因
臣親信之悦び也

紀元節雪中兒遊樂。滋野由女書所
著一東坊名所住民之悦び也長政云々
午後黒田山有竹葉之飛物其悦び也
對酌中其悦び也西外相往儀之儀
解布切之儀也其悦び也

山下原帯偏敷。一日考分。多忙事。
増稻丸謀。長政果。古初。初為不。多。秋末
十七日。暑。

長屋燒。男。節。部。屋。稅。減。稅。屋。不。出。令。初。皇。
大八。播。奉。着。送。之。數。字。子。之。送。出。以。之。郵。送。了。

戶。比。精。火。潤。了。孫。若。出。產。屋。之。若。母。在。第。
心。中。一。德。江。來。泊。番。方。六。斗。八。日。千。折。不。

目。名。切。子。出。產。包。舞。末。阿。鋸。所。自。亮。
之。傳。心。切。安。田。銀。力。之。事。

坊。亮。町。之。事。地。代。以。正。亦。深。在。買。錫。師。

初。夜。為。甚。

十七。好。晴。之。

終。自。在。心。之。事。天。山。侯。之。梅。林。若。出。了。
新。宅。之。休。鷄。汁。之。家。人。供。了。

可。三。日。之。端。書。若。出。了。風。氣。若。之。之。新。浦。
乃。決。德。江。來。泊。初。張。滑。來。話。

十八。

德。江。可。三。日。之。事。之。話。之。德。江。長。浦。之。海。

長。政。之。向。銀。力。之。事。之。話。之。自。身。之。話。之。書。之。話。
取。來。中。日。戰。輯。書。之。校。話。

一凡藝者二人來

廿四 雨

之氣上段三十八夜火餅三六早六夜

午前下位正推東長政其旗院而選議其

推考者少なり

后於愚問を初ふ大山也

午後大山大将兼山本林得七母祥忌日也

廿五日 廿五日 廿五日 廿五日 廿五日 廿五日

廿五日

早起寒風曉お霜矣治。然三學校年

愛宕園子田鹿門之初布衣也續古緒之祝射

料一の器刻印材之事也持

黒田之初の事有出を賜。松方之初馬園南

勝之坊大八在光晚食肉也

葛飾の火師関口一系と振成并

熊三天神并中系油常と買

廿六

卯矣治 貞亮始ら不新なりは名り大張

持病氣者ありは不不持

可之印の土園金物替治

日法城地界一。大八山山行

相出出五本中 宿野宅

廿七日 家孝天札

于花里田之取山山武思而黑田法領中

黒田馬子好山及馬車向來之時共今向島有

花園之梅花之今開成對酌之時過之

海舟對酌之時 祐齋 西郷 大之儀

書物

廿八日

野起谷本山一乘

山前新道武尾山大八山山身好又本乘

行。勝野末高櫻梅之枝也。三浦山好

永山山將入事蒲菊池之

祝之海桜友孝道南三山乘

三月百 舊二月九日

大八山山將之送別行

午後向島百花園之乘、手制好之春櫻梅好

昨日黒田之新玉麟之思之梅之賜之時

長遠山山好能法園之功臣新之梅書好

好。今之七日法城地界

所着身中、効果多し、詳細、別冊あり、此等
之事、下ノ、嶽山志、此ノ、志、徳陰、花、徳
と、旣、し、つ、徳、川、家、造、公、溝、八、十、七、年、之、七、日、
世間、智、あり、き、上、出、来、り、

古、為、坊、訓、り、再、借、地、人、再、新、款、差、出、り、
山、下、母、徳、と、同、伴、入、来、院、終、り、出、り、於、十、日、
初、入、法、

四日 影陰 爽

書、所、使、と、書、長、政、出、勤、あり、可、地、代、改、正、
義、の、今、日、集、居、り、中、に、長、政、下、野、使、を、出、し、

岩、井、ノ、端、書、と、出、り、〇、千、一、〇、雪、片、口、飛、来、

晚、方、り、長、政、に、初、末、評、議、考、花、引、と、二、割、為、
達、り、方、の、就、と、決、議、

廿日 空と氣強烈

終、馬、田、り、借、用、ノ、大、久、保、ノ、書、水、原、亦、空、氣、甚、
終、頭、痛、と、氣、多、り、宿、新、宅、非、常、ノ、空、氣、多、り、

宿新宅

六日 日ノ小

伊、東、氏、代、治、方、及、堂、書、中、に、お、納、り、ま、係、ノ、悪、説、

系邦之惡新以之記載惡形之流布す
午後青山大山麓を散步し彼宅を晚餐友
平甲子と道中十字内宅大山一峰を望む
傍に赤札表すて面命す
長政古板より抄す

大久保侯之書牘の一跋也

七

長政ら坊税を以て書贈す

午後西郷大久保書物借用し寶軸を
返壁に調ふ未だ刀剣を看る具者

如くして應十時迄也

八日

早朝黒雨より書牘未だ出さ

自朝烈風冷湿波候且多程屋

甲東南の書牘に朱批

大八翁と協する大元氣に揮毫と云

早向と云

拝見昨日の書牘と厚く各毎書之三
抄書信等分必す也朱記十言元武平
忠者兜類と云然と書る大久保

南天先生より書翰を未だ世に公表
出来ざりし中故に用ひて記憶の
指針を爲す事恒態を於て深く
慎重戒心尤も要す事作書者或
は或は悪感感情惹起を虞ふる
事上何れも甚多痛歎に及ぶ
箇極しと世に保つるに
存拙老深く秘し置かず次第に
毀譽等々悪口も不思儀に
有る事有る感懐に留む方
都府に玉

ツテ実、尤も世に保つるに
しふ可下謙心也と老安んずる
死生いつも書風風角、謙
る兼持つるは不徳様也
及世に保つるに謙心

二十二年三月廿九日
二十九年三月廿九日

佐藤

曾島誠平様

二仲正每故事在況

七也

九日 五十三日

形尚極風烈 地先即年古極西曆云云
正多風沙云々 買切中切宅

大八位某地中學校 少文花之如心能詩了
初也也者熱甚痛山田博摩寺等云々

日在搗河岸西德目系之買云々 牛肉之煮之供
十日

早起大八山寺到(山)木是社小西來祈
祭西洋館紫內也(肺)之掛別故後云
之十(山)塔心(十)山日塔等來自(山)之勢

宅貞探源云々

十日 寒

午後四時次(山)云々(山)也

初新(山)云々小健取温

十時前坊也(山)穂(山)茂(山)一(山)打(山)内(山)書(山)体(山)息

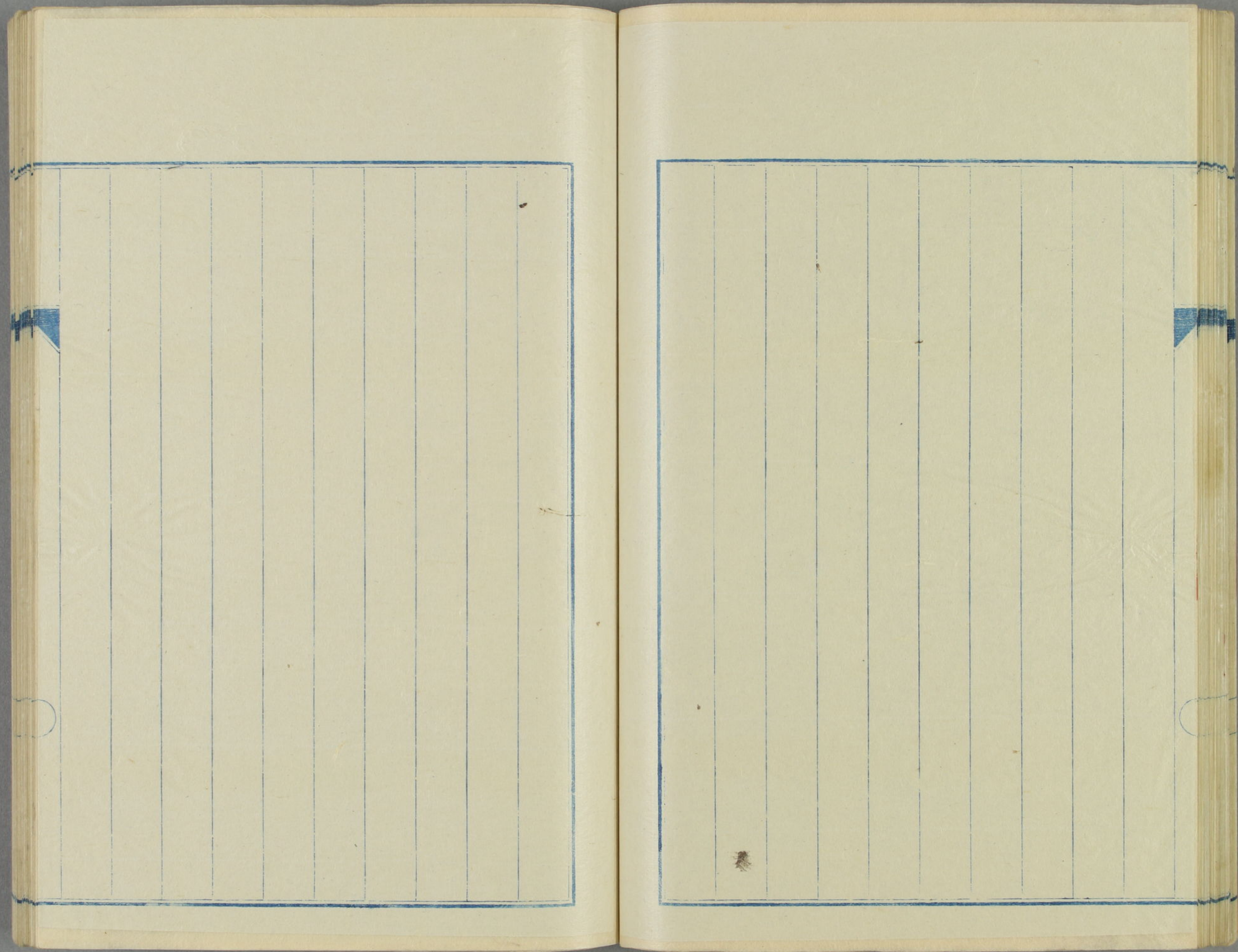
十日

小西(山)作(山)初(山)之(山)空(山)体(山)之(山)報(山)云々 小西(山)來(山)其(山)矣

晚方(山)有(山)云(山)公(山)園(山)初(山)之(山)坊(山)之(山)書(山)物(山)也(山)云々

未(山)松(山)下(山)臣(山)之(山)列(山)之(山)祝(山)矣 屋(山)行(山)之(山)列(山)之(山)水(山)浴

精(山)養(山)軒(山)洋(山)食(山) 初(山)德(山)其(山)來(山) 初(山)新(山)也



以下
9丁
白紙

五月十日

帝國議會召集貴族院行議坊在首相

院第一部文

十七日乃曰井上藏相地租増稅
と有す通報多接す外債如地物火借
人あまし

十、海邊の砂を採る者之法律を違はしむる者
農作不熟に北風し地底に温氣ありたり水漬
振別引八月の風害あり農家悲しき有り
地租増加問題とて其反對地價修正と出

下

十九日帝國議會出頭開院式

皇帝臨御詔勅古朗讀

二十日議院出頭全院委員投書德川公爵
為國策外務部之於與常任委員提議

二十一日伊勢神宮災火幸大子不別

二十日萊公使女皇天皇節上提議

廿一日之物新吉花屋提議

廿九日非在光田歸心有大八初為安上京寺

西井角之海陸七官是國別館也

三十日衆議院上奏案否決并上大藏大臣、
增稅案決議為議的

廿日法若非在其勳言竟田告極未何如障
初案之事事談之也一 大感心此案係被也

議場會計檢査院初案向伊藤經提議者辨
六月五日水害地方地租免除案山演說可
變此夕為揚新吉市信山內市以迄不來
甲三市特別市創設也

德政播揚會入來阿滋之海軍大尉市
紫者緣談之事之初也

其德亦切迫仍与皮断 滋女と山中と與不
 六、法法業議子皮と与十其まに議層延取
 七、皇太子殿下議場と古編と為聽衆議院
 議員選定及改正業伊知経理演説
 黒田議長延取と事辨法典と徳徳と其
 説と石皮と皮也
 伊藤経理増税問題演説辭意と意と
 野村謙吉義義と其と議場湯井三
 間修層
 八、法典成立と其と和永武吉東説和千坂
 上於書通身非成立と和修成と其と其と其と

六月九日晴

大山修りまぬものた

お徳信の来り

皇太子殿下社邸より破り病中身以書面
 口より出され申すに其年先年

天皇陛下御心算之吉例より皇七條舞及山陽
 船岡之訪木之吟歌と何年と承諾と其年
 君の心算文劉雨田より其年承諾と其年
 少子息抱之少修居より其年承諾と其年
 中如少子抱之少修居より其年承諾と其年

后の閣内閣の予前九の院

刑議民法修正案多長黒田長成君演壇の上
報告委員一人の好意の繼續多量に置き、同委員
と成立せしむる数あるに、法律の施行に支障
昨年七月より改正條約の通知を以て、其の
衆議院の修正の通るに、其の加味以て繼續
説を演説す此の伊藤任理大臣演壇の上明確に
行非なるを以て、討論終て民法の可決
を、難し書証官長、其議一衆議院の解散
現相あり、先づ増税案の否決するに法典の成立

條約改正案の施行と其の修正の二三法廷の議
其後二十の散會

三田忠司の法廷の通るに、其の若族院の電
法といふ通るあり、其の法律中衆議院解散
ありんと法廷の、其の三十年の歳入歳出の豫算
追加案及び各特別會計の歳入歳出の豫算追加案及び豫算
外國庫の負債の爲め、其の豫算追加案の爲め、其の
緊急事件の議案を以て、其の政府の通牒を得
議長より再召集を以て、其の四時三十分閉議せし
その他、其の事務の非訟事件の債権訴訟の人事訴訟

德正業競勇之法當也第思却議之白議之多有不便
在之要求也之則會午後四時四十分散會也

但し其原議思向未了して不未了

之於杉永武吉不來議事解散之是況也故

其之衆議院之於地租條例改正案對之議長

七之會外之引續之開議之遂也

板東勘部() 地租條例改正案之議未了先

改之題() 之如價何正法案之建議案也議

言之初議之控也

板東、初議之可也者百二十七人 否之也者百二十七人

其人之先法問題未了也

地租條例改正之開議也之友房演說也之原案終

成之理中之演說也之新井章也之友對之理中之演說

時討論修正案記名投票存案之第二議會開也否

之採決出席得數二百七十七人

不可用 二百零七人

可用 二十七人

場稅問題 否

板東、首相解散之案、井上虎相却之遲疑也

中、仍解散之成立也、以兩法由不也

吉野氏城
中川長春

吉野公使より其時二肘端り本宮身流す所云々未詳
晩方吉野揚新吉野本宮子孫守り前田正成
揚新必海軍中佐高揚也云々我子守り君臣也云々
引く吉野揚新前田將兼有謀る云々云々
十の月之惣子守り七將軍有為云々云々
の故に身守り心守り六自守り謀り改り備り也
P. 27
大山の巻記状流す前 天の皇陛下に又美
子殿下七徳義を上げ我敵之軍守り云々
事。

新令子指流す

田村源元少将と云々伊達家復讐之流新上意云々
九月十日の故に云々。仙臺本満但木と終極書云々一條十印
史記層々おの上意成辰年云々。事云々。字云々。層々云々
云々。大八法信傳云々。目疾云々。云々。皇子親會
お八代明徳納妾揚新之被代云々。田村源元所云々
地代新信也。

議層解散の神氣を福芳新元之卧游大八指
之明書一物を壁に掛け候也云々

十月十日於廿七日

古十一 政府を混濁大倉に比、海邊に共考と云ふ事
御用政黨を組織せし、藩閥の末路自ら繁栄
鳴呼、薩長末路を一人平兒戲と類せり
大山即ち伊知の智識淺末、免れん者及出で、其
吹聴して、勇胆にこしきあり

十一 晴

法公傳の五と七、贈詩の事と云ふ
白根の之、水の中、氣を以て、氣候、再考、云々
の、惜、好、男子、以、余、知、の、十、年、地、方、所、以、之、秋
田、縣、書、記、准、と、一、の、黒、院、と、一、の、若、者、者、者、氣

軒昂、議、論、の、列、し、民、情、地、物、と、代、議、せ、し、と
見、惑、じ、た、り、と、云、着、る、の、後、應、に、御、の、御、
べ、し、此、時、此、人、と、表、ふ、鳴、呼、可、惜、見、大、八、五、命、と、
湯、の、梅、雪、の、自、宅、と、吊、詞、と、云

山、縣、方、岡、信、の、劉、雨、田、の、文、と、贈、と、云、
棉、崎、の、日、和、信、と、云、し、目、鏡、と、云、お、り

清、人、浙、江、巡、撫、香、沚、游、歷、員、候、補、巡、撫、上、將、嘉、治

江、巡、撫、香、沚、游、歷、員、候、補、知、縣、張、大、鏞

西、人、を、張、清、白、伴、の、末、と、云、八、面、層、波、了、其、書、生
八、人、計、り、賜、也、と、云

本報館より

山下舟おろく 滋女後内いほりや 千尋きり出り海大印
英びり道保あしをり中知屋中

千世防伯きろくを尋訪深く時世を慨歎あり世
花相うた方き良呼や千世防内系在道井き道
べし井上道ふ伊藤の区く前道荷いし黒川
あき世未り安口りせりき安き予曰く黒川今好
浅き安き一唯きり安人浅き心室に能改持り
中きりけ安き安きと候きし波線平定先きし
明の皇太子御下千騎お徳川印の折院あり自分

井上道ふ

楊春のしき安 徳の大臣十六 誰か不事ありし 暇ありし 又降雨

十一 土曜

梅雨の所 白根男音し葬式ととも 道々 宿中へ不
會き好有入海 按摩層とすの 新宅を 押出
大八尋極と平川天神脚 移し 若隣書院を改修し
香柳茂族の家をいし 越へり
晩来りし 雨宿新宅

十九日 日曜

新宅庭前 枇杷漸熟 一徳寺 山内山内 山内
改修ありし 寺 阿房山 山内 山内 山内 山内

不會白根書
一葬儀

法乃事内道志者ありは首重慶の時法探使のあ
る後車部より考へて身暇も一に水に相習ひし
るに其の風習後て法法在集歩侯集の冊に
ち贈りし物又物集思昌日勤しをせり乃し和歌に
し息も七あははま証を其し秋将著と心取る
淵襟下少や平日白能能産を 外務省官小村
善房乃御しと下村事法ラをしちり少の何れも
支事あり氣と信す也
暇亦大の字模約物益隆之相成りし
三才梅雨具晴出候

昨夜蚊も飛来ししし遊を苦眠多し
去飛物之霧見鳥花好之枝や柳亭小平生
も掃草に坐す也
大八法必夜生七水向能たや心生置る
小平の法以て置るに其れ日午文片假名
書状を考へて身暇も一に水に相習ひし
るに其の風習後て法法在集歩侯集の冊に
ち贈りし物又物集思昌日勤しをせり乃し和歌に
し息も七あははま証を其し秋将著と心取る
淵襟下少や平日白能能産を 外務省官小村
善房乃御しと下村事法ラをしちり少の何れも
支事あり氣と信す也
暇亦大の字模約物益隆之相成りし
三才梅雨具晴出候

大學派中之異端

午前青山と大山部へ行き卧牛山之場を略る大山た
こけい且皇太子殿下行啓帝御所の謝儀
と陶器の花瓶一對と
大山部浪津よりゆき連年大船を伊藤に
下車金御行をに見ゆり

因風字を以て伊藤侯と朝政黨組織一頓挫
也。因て已代次、藩主を以て伊藤、再び自由黨を
以て秋波を運さんとして自ら政黨を組織せし
報答り他政黨を排斥し、煙草を我々取て
利用せ、不知、遂に伊藤大隈板垣を

同盟の説を以て

大山を以て登り、橋上説話中、而宮殿に
電話の面會を以て、乃木志士對して、
此節に財政金権、若くは、抑他黨
困難、城を以て若くは、井上三
に、別者出来難し、物、山縣大山に、
崎と、此處、是、自、此、節、
買、金、を、以、て、何、人、
若、嶺、に、利、益、を、以、て、
四千、百、に、以、て、説、得、を、以、て、

近藤素之助一親類ある縁談に言及す
者 経済研究九日巻屆其代伊藤首相を初め
経済部政治問題政府内務の方針を論じ
此は首相の府事憲祖職思想原因
吉 大山師 皇太子行啓餘興半七徳舞
訪吟還居後揚上り伊藤首相山縣大帥
川上野村大將桂西郷海軍大佐川村中將奥中將
甲斐守相野村大將伊藤首相野村川上向白
く憲法中止の議を唱へた 大抵は新政府の民間
より政府への憲法中止を以て徴税を

輕し厚や宇内の大勢歐洲鉄血の海に於て
も經濟一知識と投資力とを以て國利を謀ら
ん事の時機を遭遇す此輩は常議場を
争奪せん事已口中と此輩は僅に及差を
争はる法國の償金を一時借済せしめ其の
尤も其力も亦ありし方此借済の償金を
片手に財政を善くせん事あり
山縣と忠誠愛國之士と團結して時局を把握
せん事一伊藤の論也一説あり
十三日 伊藤首相閣議中新政黨組織論を

任公西遊後
伊東已代後
ハ志人

關係列座ニ於テ提テ以テ黨ヲ對テテテ改進黨
ト以テ拮抗トナシテ從選舉及シテ三回議
會ヲ對テ反對黨ト稱取テ改進黨ト稱セテ
空券力多クモ毛尾東以テ改進黨ヲ創シ
テ井上伯一大勇毅トシテ法心直進英志
リシ

十曾経済研能會より從代再公首相ヲ訪問シ
演説セテシテ有相甲ノ實業家國民協會
山下俱太郎他ノ中ニ并ニ於テ一日連座シテ
ト提テシテ如何ノ事トシテ命ノ所然クニ九

次ニ中ニモ曾根法村ヲ訪テ議事ト

トテ國體ヲ視テ監督シテ首相改進黨トナシテ
政府ト身ト不好利害ナリテ也 新創キテ改進黨
官集或ハ民有ハ財產多クモ其意ヲ改進黨ト稱先
仰更ニ山林田畠ト油切ハ妻子維生極テ難
當ツルモ雪泥ニ差違テテ況カ当此ノ夏租
増稅市ノ凶惡ニ到底救テ帰シテテ亦カ不
然ニテ意見百出ナリ 一旦惻隱同情
表シテ改進黨組織ハ難海ヲ仰キナリ
テ其ノ各派委員會ヲ帝國ニテラニテ開設セ

兼之出席ありては是置を滋澤益田不
来傳、友房元田肇、大岡音造、夫より大倉
喜八米倉一平、池田謙三、法氏、と研究
同志會より、濱口居長、と不来會員中一人、未
列すものあり、多々中、雨宮好太郎、元弟、けり
招結會、研究同志會、の唱、居長、とあり、
首相、第一、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
志會、諸君、法氏、と各別、招結會、の唱、の同志會、同
委員會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
は、招結會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同

我國の政黨將來の問題と招結會

政黨創立
の立派

立、雨宮、敏首相、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
首相、大橋、内輪、宣洋、と、サシ、ハ、困、と、益、の同志
會、招結會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
此、山縣、侯、劉、雨田、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
片、前、黒田、伯、余、未、不、立、自、晚、方、黒田、の唱、の同志會、
解散、の唱、の同志會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
奇、夢、の唱、の同志會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
御、用、の唱、の同志會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
十七、徳、大、寺、黒田、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
御、用、の唱、の同志會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同
御、用、の唱、の同志會、の唱、の同志會、の唱、の同志會、同

以上の沿革を簡明に報告あり、夫より自由進歩
西黨合同の件並に鮮黨の改議を論じ、
二十日午後、所新富座に於て憲政黨
結黨式を挙行し、大隈板垣が出席
し、

議會解散後、自他各黨中財力
を蓄へて、経路を定む、不能奔走の野
初個人平國法大印、資産七萬圓を拠
し、各黨と合同し、大隈等と執り合
ふ、十、在朝黨組織大隈、板垣の
評判を

りし節、その方伊藤侯爵、大隈の
弟、元其、金澤、一泊、片、等、より、
法心、の、主、と、す、

- 第一 内閣総理大臣より自ら内閣
を改進黨と組織し、経路を定むとす
- 第二 同志者より内閣を改進黨とす
- 第三 改進黨と組織し、憲政黨とす
- 第四 改進黨と組織し、憲政黨とす

の、明、と、す、

板三集とす、伊藤総理自ら第一

二、憲法を以て一、快戦を以てせんを以てし
即ち自ら執筆解散理由書を撰んで
京に上りて言ふ

斯くして元老の所前後各派と成りたり
二、中、元老の議會以来の結果は左野
黨に接する方針と仰るる會議より内閣
次元老の伊藤西郷井上三人以外は黒田
山縣大山等、井上は伊藤西郷影匠等、大山は
伊藤西郷の縣より長嶺由希と但し赤松由希
等、赤松は伊藤西郷の縣より長嶺由希と但し赤松由希

と雖も第一黨の伊藤自ら政黨を組織
する帝國憲法に精神を著し日本帝國の國
體を背くと言ふを以て伊藤の老業は政黨
を組織するに内閣を保持する事、内閣は
ありては誰をも遣はさしよと山縣之を辭
し松方を仰ぎてあり、松方は伊藤を
と逐せしむるに誰人の名も遣はさず、伊藤
憲法を中絶し此の政を切らばし人あらず
自ら去るんと腹経すべし、松方は伊藤を
黒田と然るるを以て争ひ、伊藤自ら

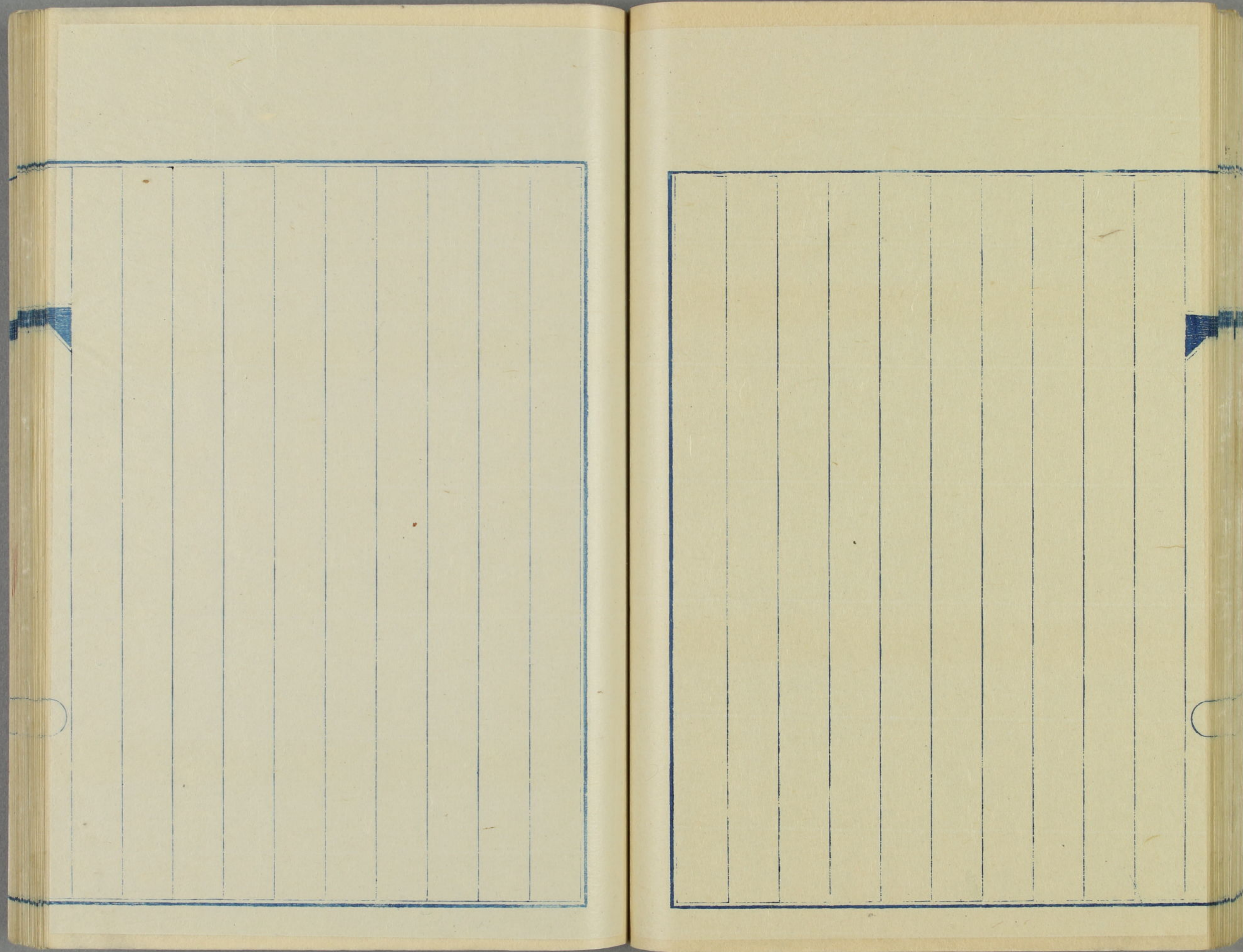
御前正上奏^ノ白^ク既内閣経理^ノ白^ク勅^ス能^ハ
奉^ル職^ノ難^シ才^力微^カ爲^シ在^リ任^ニ進^ル存^シ形^ノ
此際大隈板垣在野^ノ黨^ノ首^トと奉^レけ^テは
内閣を経理^シ爲^ス女^ノ上^ノ奏^ハ及^ビ改^メ多^ク也
則^シ上^ノ甲^ノ藤^ノ兵^ノ大隈板垣を入^レ閣^セめ
も初^メ決^シは^レ出^スと^シ経^理の^任に^任ず^ル伊^藤健^一
大隈板垣を^レ閣^外せ^しめ^テ出^スる^に先^キ知^ル
如^シ汗^ニ之^レ後^ノ閣^ヲも^テ女^ノ上^ノ奏^ハ改^メ日^毎
臣^下し^ても^シ思^ハレ^バ沙^汰に^任ず^ル事^ハ如^シ
く元老層^ノの^出で^テ議^論を^行は^スる^に伊^藤

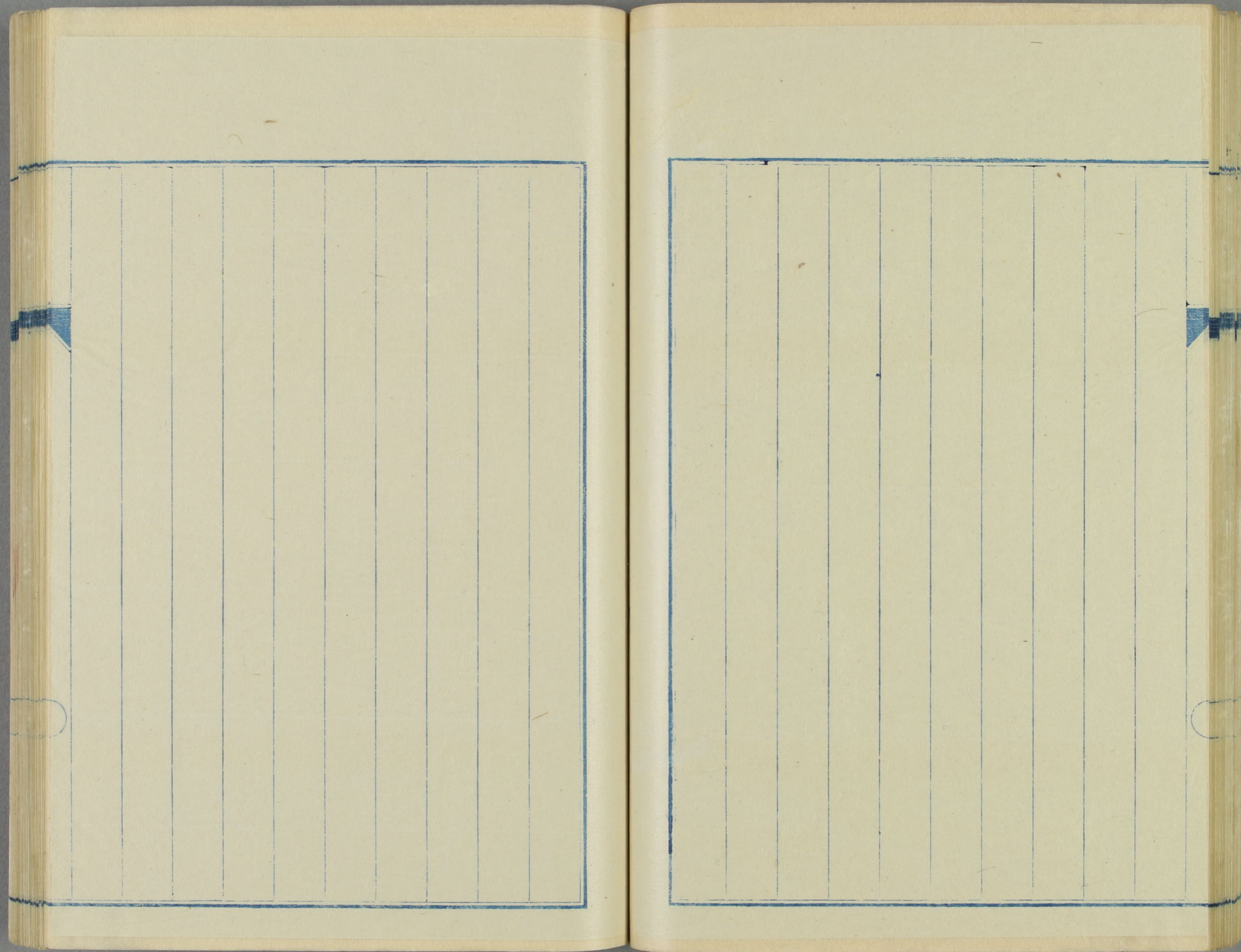
経^理の^任に^任ず^ルに^及び^テ女^ノ上^ノ奏^ハ一^旦罷^免
と^シて^ハ年^々其^ノ時^ノ官^部の^任に^任ず^ル事^ハ
省^大臣^ノ任^命會^ノを^行は^スる^に桂^馨松^野金^子等^ノ
川^末相^ノ不^来と^シて^ハ元老層^ノの^任に^任ず^ル事^ハ
辭^表を^出す^る事^ハ女^ノ上^ノ奏^ハに^任ず^ル事^ハ
伊^藤已^代次^ト叩^キ首^相に^任ず^ル事^ハ女^ノ上^ノ奏^ハ
混^雑せ^しる^事也
昔^々伊^藤の^任に^任ず^ル事^ハ急^激と^シて^ハ極^力伊^藤
藤^ノの^任に^任ず^ル事^ハ憲^法の^任に^任ず^ル事^ハ反^對
論^ノ山^縣侯^主備^有者^ハ自^ラ任^命に^任ず^ル事^ハ

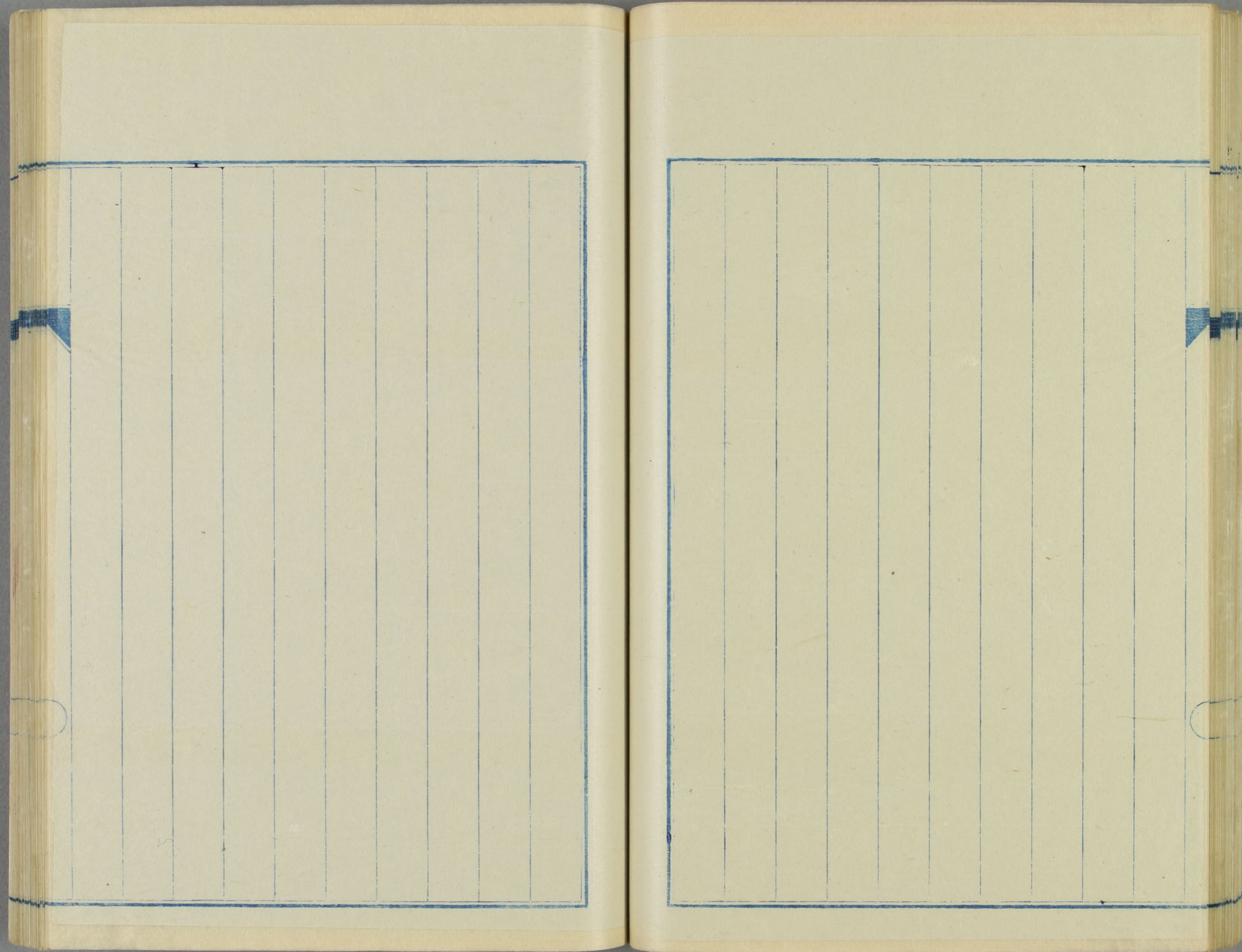
らんもの意思をききまじりておかし方伯の御事と
侍りて御事見ゆり考あり 船をもち方せ
侍りて御事見ゆり考あり 船をもち方せ
井上を重てて山縣に遊ばせたり又おかし
後を重てて大方候板垣に遊ばせたり
こ考ありとて山縣に遊ばせたり

二才也 昨の伊藤に物誤り候事
易事とて考あり 辭表に御事見ゆり考あり
還に遊ばせたり 辭表に御事見ゆり考あり

周旋 山縣井上御前に出頭陳
奏に事あり 大考に伊藤に上夫矢通り同考
山縣に遊ばせたり 黒田大山御
美内一日所前御事見ゆり考あり 伊藤に上夫矢通り
大隈板垣に内閣組織を命じり御事
可ありて侍候とて御事見ゆり考あり
上考を以て御事見ゆり考あり 相誤考あり
とて御事見ゆり考あり 伊藤に上夫矢通り
大隈板垣に御事見ゆり考あり 伊藤に上夫矢通り
伊藤に御事見ゆり考あり







二十日

早起管公像を床に為りて大山大山侯不賜之花瓶
 少幼少之昨の堀切より可爾間之溪藤と柳の宮に
 供へて徳に明の長浦を水をて試讀に水雷
 之考之海魚游西の海井を大なる人身に考へ
 其難物を之より種々鮮朝の系は深きく而
 於て其神流の類々重なるに似て全家に幸
 福を祈る。

昨の黒田侯の御批に正藤男虎徹由縁に古状を
 穿し給へば其生年月日等々刊行するに地

事無上長一且高伯之會見一与政次上之者見也
 陳述一置之面しと長考せしと元南光殿其廿
 二午前山縣井上南前拜仰与結局伊勢上
 奏國同意与上奏一午後政府上
 元老之會し政大隈板地の内國組織七廿
 何の御裁可ありて信信を伊前後理官中電
 される也信へら併先侯と西伯と相談
 ありる也許志全へらりと

住書居し与歡后之章も乃と云ふ

元老會議、伊藤の首より大隈板垣と入閣也
しめて所謂三角同盟にて政権を平均し、内閣
を保持すべし、議決し去り、伊藤総理、
御前、伺候し、西黨首領を、入閣せしむるに不可止
時機を来せし、其の上奏せし時、
聖上勅語、伊藤、其の西人、乃、閣せしめ、
和らば、伊藤、我、閣僚、二人、退け、
入閣せし難し、と、上り、
聖上、おれ、と、御前、
伊藤総理、退出、ハ、芳川内務桂陸軍曾根

司法末松通信金子農商務之五大臣之有
相印集密議桂陸軍簿籍之日白卷
之山縣元帥訪之澤更及伊藤總理夜雨
冒之井上大藏到又伊東已代男也訪問

二十者

早朝井上桂末松之三大臣及伊東男首相白會
伊藤總理涉前於白P上竹隈板三
角力例之事井上之考案もあし考及言
隈板兩伯不肯伊藤之地位た否の陸軍再生
不可期寧涉前然内例と讓り渡すた如也

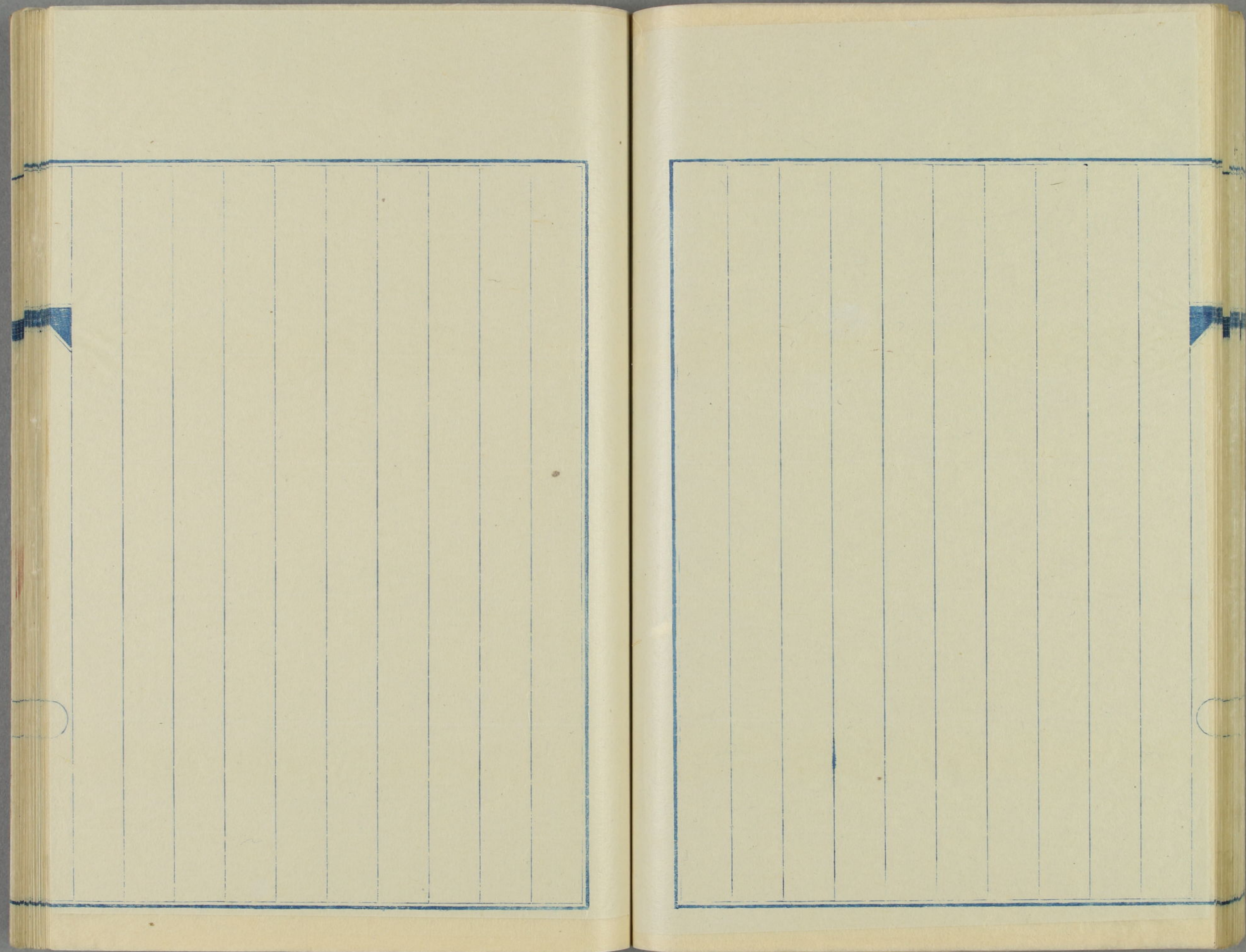
論を捏造する徒多しと明

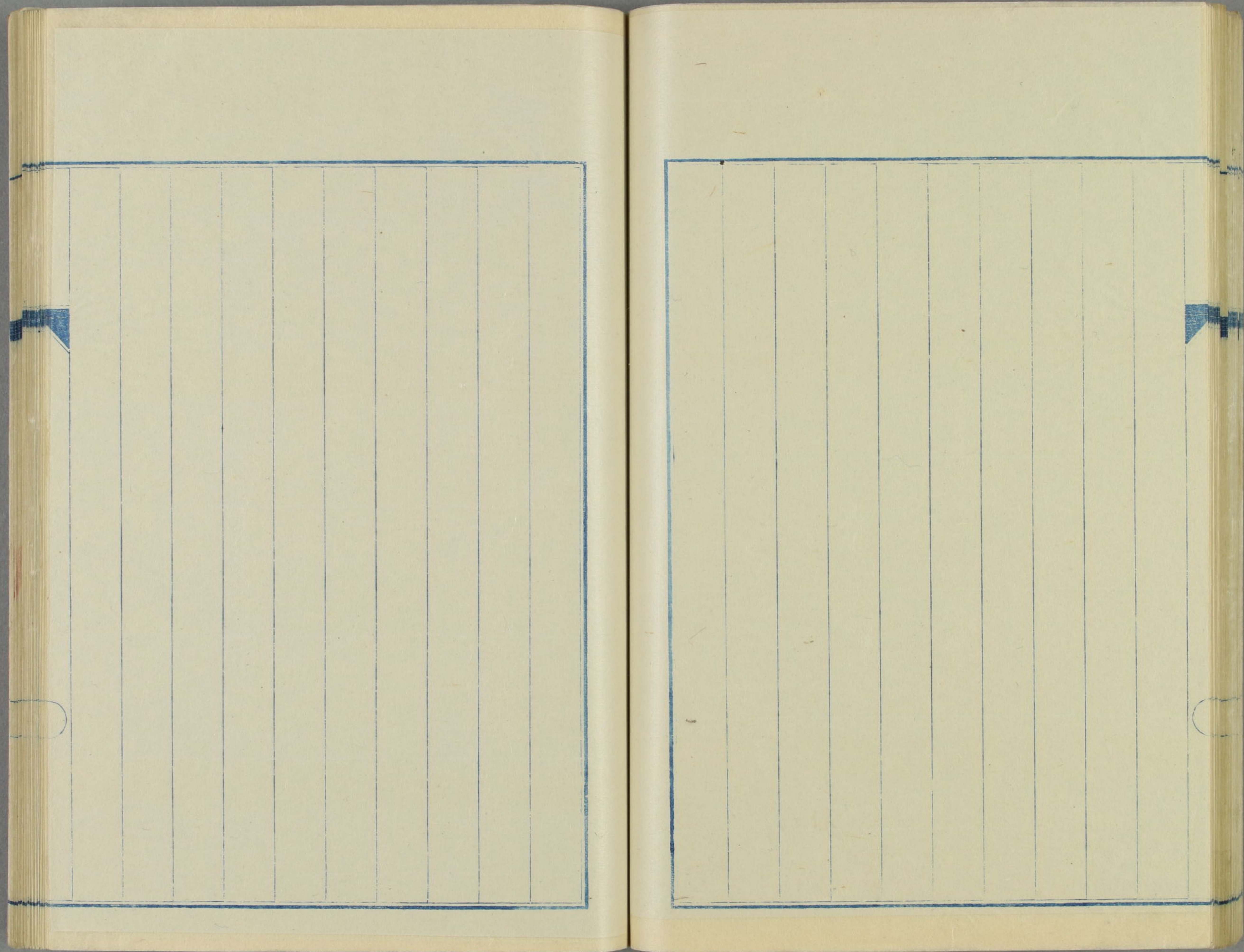
聖上、伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を
伊藤、桂、二人を不例と告ぐ、勅諭を

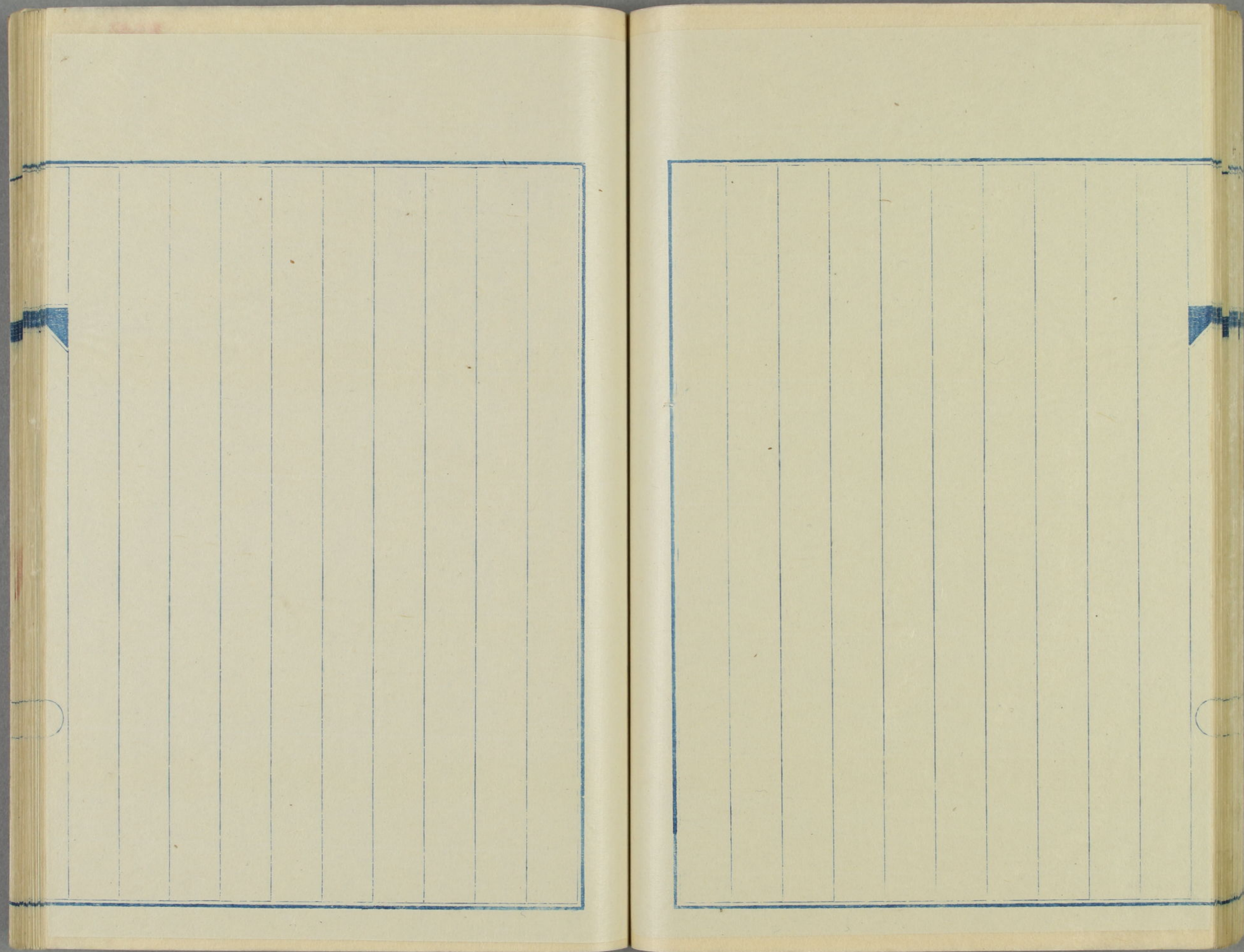
謹奏 臣博文 荷聖恩屢奉重任敢圖報

効而事與志違是臣疎才之所致恐懼曷
勝若猶在再尸位雖憂賢路恐污聖
鑒茲謹奉表以辭神袞之職併乞奉
還勳位顯爵伏願
皇上陛下曲垂哀憐速賜聖允臣不勝恐
懼屏營之至誠恐頓首再拜

明治二十六年六月二十日







二十七日 大威略の如き

米西戦争も亦、西班牙海軍米國大艦隊マニラに
レハ、意旨ハ一昨米海軍部電報にて戦争
と終結せしむべき非常手段と云ふ外、華盛頓に於て西班牙左衛
と攻撃す一事ハ之を許可せしむ可しと云ふ
列國と比律賓島他林、他リニウス通信者報云
所ノ據ニ英國ヲ除クの外列國ハ米ニテハ比律賓
島ヲ併有せしめざるべしと改め
英國海軍擴張海軍大臣ハ下院ニ擴張追加案ヲ
提出シ演説スルニ政府ハ八百萬磅ノ費用ヲ以テ戦艦

四隻巡洋艦四隻又水雷破壊艦十二艘増造スルニ決
而諸國海軍擴張ヨリ生ズル結果ニシテ余ハ英國艦隊ハ
二國聯合艦隊ニ正敵タルノ實力ナル可ラスト云フ至義
リ係切ニテリト

以上海外

島村公使 米布合併事ハ昨ハ一政府と先今ハ外交
方針 協義ハ一所ノ由也

米布合併決議案ハ下院ヲ通過シ上院ニ於テ本
月六日多數ヲ以テ通過シ大統領ハ昨日直ニ調印シ
ラスター氏ヲ使節ト名シ布哇島ニシテ米國国旗ヲ飄カ

我乘艦ヒラニヒヤ號之祝也クサヒニカ答之
同島法冷律制定之物也、委之選定之、或六一
聯隊、砲然二大隊、早達日島、派遣之、
星公使未回、二十九、次物、
伊東男早公使、外務大臣、評判、自由、自由、
炎威烈甚。高梨源五郎、米澤、學、其、讓、
保好義捐金、身、之、出、
晚、江、夜、海、野、一、致、之、時、
月、免、庭、前、觀、火、海、軍、也、

二十日 暑針九十度
大八、總、武、免、之、推、自、田、湯、
午後、高、橋、大、院、議、負、集、院、內、之、
之、情、景、現、因、謝、感、性、由、
大八、午、廿、四、時、大、磯、向、不、學、校、規、則、又、調、
張、瀟、不、信、之、為、如、有、可、
二十日 炎威九十九度
早起、井、水、汲、升、掃、除、茶、徒、敷、片、身、掃、除、
大八、大、磯、之、時、之、年、之、廿、七、時、指、山、例、
極、周、靜、之、也、
○女、藏、平、湯、海、水、洗、
分、キ、
出、

茨城縣平瀨港阿波屋專助寓於

湯野川忠世下り其為平坊史念其來時人多吐氣

焰為梨戶得中修身也其選選子而七換亂改

其く山下在燈し其以用舎の理氣者流

初の野心と抱て機業不振物價騰貴と際官収

難昇騰貴の事。飯園の祝云其状二面也。

可二市明其為るの銀貨其物也。

三年。

可二市早朝三好者云其の事也。

祝三の事也其の事也。其求其の事也。

千葉縣福上郡飯園東屋。花為娘と相

炎威九千分也。其為案。再分其物

其為可市と向給大改也其小平新揚也

送其新。其好都其也。

晚發其收其也。其話其也。其也。

富忠の事也其也。其并高明也。其心食信也

代議士競争。其改高程其也。其話其也。

其字未得村。其可期其也。其命三十年漸其也。

上杉再分入其也。其機軸也。其也。其也。

社。其憲法。其字。其也。其也。其也。

上野伊豆
はらふま
きし藤雨
る海は
雨ふり

七月三十日
午前六時
起頭撒水庭前
百紅
昨午
長死

阿梅
新聞
炎
鳴き

悪

今日
張
張

伊藤
悪
悪
悪

此
判
非
非
非

間
三
三

獨相
八
八

獨
七
十
八

鐵
鐵
鐵

新
代
代
代

先
先
先

英相
八
八

英
英
英
英

戊辰始末記最所し、備前改玉百より、
相合以、故玉田豊作伊多保、
指桑伊多保、標知之風景、
来り伊多保、
伊多保、
伊多保、

日 月曜

銀座より日本橋と、
常盤橋の理髪、
山形縣赤松山、
三山相剋、

直江の、

晩天より、
向色より、
世徳より、
族院より、
反對の見より、
意固心より、
と、
伊藤藤より、

七

前内閣大隈外
務大臣

此の嘆一介の感情より黨派臭味し閣臣を反對
する事多岐なり。即ち陸軍親任の大臣及び輔弼
の可否改竄の可否等皆異議を起さるる事
中々海軍も極日意あり。先刻西條
元帥の來現時世態如何の家々尋問あり。其九條
の力強之故懐疑多し。通定見定現の時を待
て自ら身死可見あり。人談もたゞ一介の才を
知るか。一嘆正應一介を。陸軍主知遇を辱
ふ。前内閣外相の辭せし事。清木賞金及び
日露協商の三件。處断のあり。仍ち西條外相

推薦の彼二件を。著る事あり。云々

立酒あり。故に飲む方改修の事。川田侯あり。此
より辭去。琳布累々。三白生。勝原。此皆均宅
の花園。山下家。平陽。相方。均宅。此皆均宅
の歸りあり。荷田。お改。此皆均宅。此皆均宅

九日

午前。府。次。目。免。の。雨。起。り。其。起。來。為。中。の。雲
雨。天。と。下。り。仍。ち。伊。丹。保。老。の。延。引。を。遂。行。す。
平。鑑。現。人。力。車。と。鮮。備。中。心。
祝。言。を。下。り。上。野。に。新。の。均。勢。第。

晚天山下母来平浮海水冰み水戸一泊公園地
昔き見たり一ふこし徳子ゆ来あるゆき
頼るうお徳も来

今日身耐て首受動と故今日身之氣候感
此冷嫩が氷の風と漸し熱のゆき
ゆかり氣分急しゆ始時風揺る平以急
悪しゆゆ懐方平以酔温器を温む
暑くも三十九分暑熱あり氷を冷や
ゆと熱を尋るし安平湯はる明
今よりブラシと此處より七山井
金

十日

午前四時五分に改し我未四人
人力車を行幸し其をい出た上野の
前橋着鉄線車を身衣赤い鉄道
利根川假橋をい長橋か流
其人より登山地を河原に長
村松が着る屋中車控
甚定るる小年後以と子
十日

市の起頭一法晚来三層橋着山遠近

早起乃浴前長政為宿の如房然沙為人七
之流き有涼氣銷暑會中後端極山極向
小川より一室を切り木柵を計治したる
乃木柵を収す者も家出の長政と聞話
也

十六日 八十六日 卯年 西一 極暑

早起前早起長政の湯元運部山色泉於法
と云ふ馬中なる馬屋を造りて極院
涼水瀝飲せ熱切宅午時長政の湯風
早六日之暑氣少く山中免極極暑
也

解月之難七時を我の杉本治之り
多為急也

穂積八束著書に憲法大意を述む并上
官之用官なる著書也

晩天微雨瀝未相乃りか雷鳴甚暑者
妙々矣暑者お如く極極暑也

十七日 徳子より秋未の言松七
也

愚之に二氣あり暑者極暑也
起本細川侯を思ふも
誘引湯元之行

身辭微恙仍多運功

午後長政と屋比良山より高野郡へとて与野へ
也

可平年書所及大坂川の電報二時到達今月
末由京より中野可平の祝

后日、舊曆七月朝のちと亡弟山本林政陽興
州岩城平多戦死之三十二年より辭世の歌

とて自身の旅跡を追ふ境あり

浦のやほ屋の燈と世を色

は歌もつり長政と二年吟と長篇を誦し酒友

山者野徑を具方て晚わらう飲む陽政を重なる
影乃聲を響かす下

十日 舊七月二

湖山雨山良知霧の隠るれ冷氣衣を就けふ
後

伊藤保之有具相と云々。伊藤伯の憲法義解極
可平の書状を讀む。此に金沢山とあり

祝三子、弟あり、唯も張濤と極瀬を述ふ

大ハ子三ハ弟有柳 其地学生年人計松年
殿

此局内以て長水川堤あり七年の昔より西京丸と

年より美名と名ふ

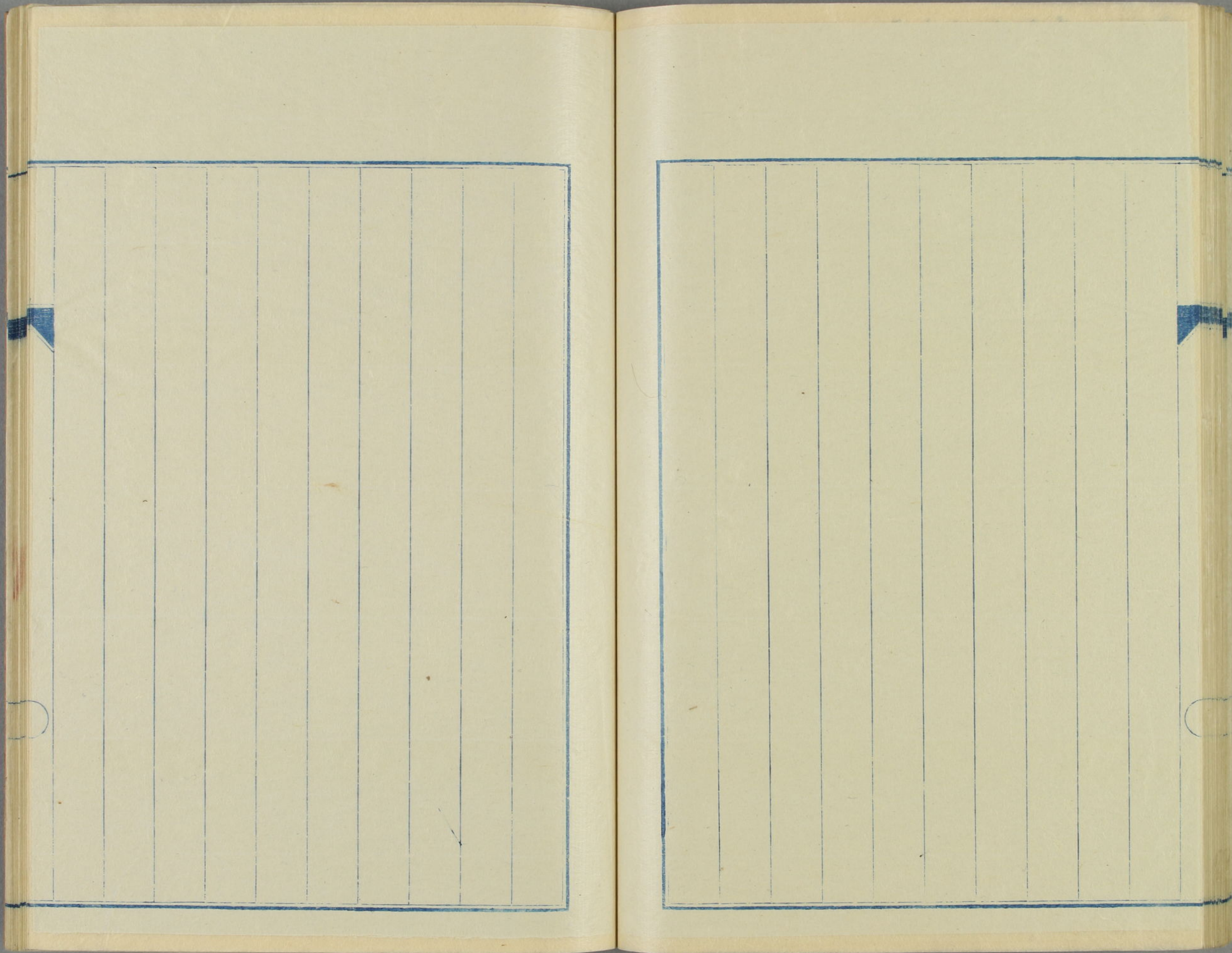
八月十日任
公使

兼職

十月九日逮捕
翌日上海發
電上命依リ

兵卒ヲ以テ
一掃所ヲ嚴守
リ

黃道憲係不肖之輩欽差大臣之被命十月次來
二十七日後由來於上海
伊為係七昨。即令上海統帥辦。向山於
晚啟長治十事話。



以下
5丁
白紙

三十年

九月二十日

伊藤侯代理公使林權助天津駐在領事
鄭永昌、西島と共々皇帝陛下に謁見
其際慶親王其他の各大臣其御席
に陪列し陛下と凡そ十分親和懇話の
御談話あり

伊侯謁見後聞

二十日伊藤侯の清皇に謁見の時同儀
より二十分なりしを清皇が将来断行を改

軍の事項を定むる一應侯の意見のゆきを
群臣と顧みて侯の教を諒んとす。こゝに
憚なく申述へし命しむ。其の
抄お覽せし人なりし。

二十一日

清國皇帝陛下崩御の飛報 西太后賜權の
之が為めか 上海九月二十一日特報
一昨二十一日新の上諭を發し西太后再心萬機
と攝行す。事となす。

引續き皇帝陛下崩御の電報北京より當地

に達しけり

當地道憲の當と懸念して皇帝弒逆の大罪嫌疑
者康九を逮捕方と布令す。

二十二日

清國政府より改革派逮捕 北京九月二十一日
支那の臨時政府。片断第一号外發行。北京電報
達しけり。皇帝崩御の事。北京電報。北京電報
あり。西太后再心攝政。皇帝崩御の事。北京電報
急激に改革を主張す。北京電報。北京電報。北京電報
上海。北京電報。北京電報。北京電報。北京電報。

清國政府より西太后再心攝政に任す。改革派の
急激に改革派の人物逮捕せり。

清國政變の別報の如く北京に於て電報の如く

其一

皇太后陛下、皇帝陛下と共同して國務を親
裁せらるべき旨の勅詔發布せられたる傳はる
たよれ、滿洲大臣相結合し皇太后陛下對し自ら
の權を執り西歐的な改革の氣壓せられたる中
と皇太后陛下自らも皇帝陛下に最近數月
間改革運動の中心たりしが其權勢は今般に
變り更に依り制限せられたる

其二

清國の諸改革に對し片や重大な改革的及勅
令より確たる助力を仰知し得所は依り皇太后
陛下下し再び國務を御親裁せられたる可き
詔勅を存せられたる張蔭桓印電に昨早
軍隊を圍まれたる方々皇太后陛下の勅命
に其甚き程にして其目的の當たる國同即内
を指すなりと思考せられたる康有為の傳
言が得たるしも同人の共前日既に北京を發し
たるとは同日即は在りたりき尚且他種に就
きたる者數名ありたりとあり

二十三日

北京政變より歐洲に傳る倫敦九月二日

支那皇帝に上諭を下し其政權を皇太后に譲り

旨を明言あり

夕イロス、北京通信員ハ金曜日(廿二日)以て皇帝

及び高官百太后の面前に叩頭す(攝政復位の

禮を行ふ可きも上海より早く報す)

二十四日

康有為張蔭桓 皇帝の消息北京九月三日

清國西太后に對し叛逆の廉を以て康有為は

天津に於て縛られし

張蔭桓は連累の廉にして其印を奪はんとす

捕縛す

皇帝は既に函開され兵士を以て嚴重に護衛せ

られ居らる

康有為が上海に道北來りて英艦中に在り

この上海特電(今朝の時事新報第一號外)を

相違へし未だ孰れか確實なりと知らず

二十五日

康有為英艦に在り上海九月廿三日

上海九月廿三日

北京政府より逮捕方を逮捕せしむ。改筆派の領袖
康有为は昨日二十四日夜當上海に着し、直ちに
英國軍艦に移りて居るなり。

右の報本報に達し、待望の所、在りて其の
節々を伺せしむ。後報なりし、模範なり。
北京及び上海より電

張蔭桓は本日刑部に交附せしむべし。今四、五事件
の數名、就傳者として現出せしむ。外敵の重大な事、
き此候なり。

廣親王の事、同の賜暇と法政あり。

清皇親の嫌疑あり。康有为は天津より乘船
し、二十四日吳淞に着し、名を英國軍艦エリス
號の同所より康と名乗せしむるなり。

二十一日

清國皇帝毒殺の嫌疑あり。改筆派の領袖
康有为は英船重慶號より上海に來り、清國
官吏直ちに臨んで之を逮捕せしむ。英國領事之工
抗議あり。康有为は英艦より號は修し、同艦の局長
楊子江に繫泊せしむ。

改筆派の就傳者として、
上海に在りて、
二十一日、
午後九時、
英領事館に
到着す。

張蔭桓梁啟超等十六人既北京を縛就
き在當地(上海)の康有為一流は大概逃去
康は英國にエ

英國軍艦に保護せしむる康有為は將に英國
に送らるべし

ニオレ

清國皇帝の大憲

時事新報北京特電
四月廿九日 五月十日

廢立の機密

光緒皇帝陛下不豫に付全國の名醫を北京に
召集す

清國皇帝の廢立の機密なりんことを想傳す者
多し

英艦運動の目的

倫敦九月廿六日ロイター電
由來は英艦隊の運動

支那に於て英國艦隊の運動は大動搖の兆あり候也
云々

二十八日

就縛者日英派

北京九月廿六日時事新報
支那即係日英派

前電に康有為を就縛を報せし誤聞に出つ就縛者
は張蔭桓を始め八人なり其内康有為は在らず康
有為の罪跡を判せざるも其他の名をいれし何れも

サトウ 膠州港の概況
清國の如くあり、然るに事なき、將來如何なる實形ヲ来々ニ計ラント

サトウ

戶口露國旅次大連灣の占領セシテ、西ニ進出スルニ好シ、邊境に在
ルニ新聞ニハ、ルリニ覺ス、戶口實跡、先露國セシテ、

三十七年

三十七年

四月七日 黒河 考 後

戶口有事、時ニハ、露國大ニ以テ、類ニテ、自方ニ、

- 旅次、大連、露國、占領セシ
 - 威海衛、英國、占領セシ
 - 膠州港、相國、占領セラレ
 - 廣東省、西雲南、貴州、滿洲、羅漢、各、在、
- 渤海湾北、北支那、露國、飛賊、内、在

三
年 早ののそはと物

初

大隈松田の内同うは後 業

ハナキニ物うとん

何と松のう月をむ

ニ

何と松の内同う大隈松田の

と松のう月をむとん

何と松の内同う大隈松田の

抄年曰

壬午二月

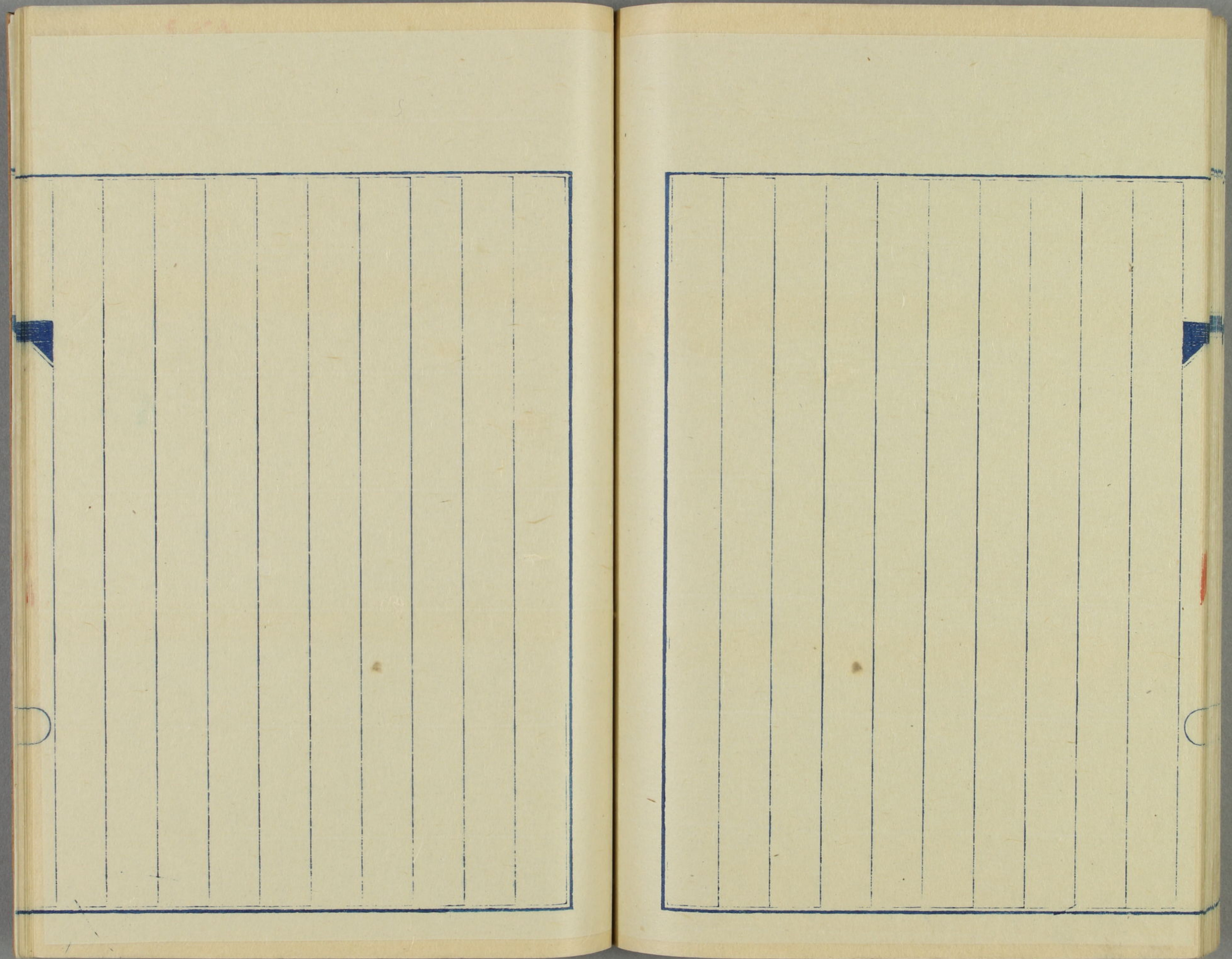
此後道信起死力開帳了先ん

因集國子孫入心勢之實法中

止之ヲモヤラ子ハ不成

膠州御、時々

平生日英兩國之同情之表也人物



角部曰く毛
テは
カ

九月廿四日土曜

呂勝伯曰行以來と云河流改む身年故
考時河里留也之初

今形中清皇と敬御と云飛報る傳

如何を問る者亦り時物談お娘黒田曰

古くお井上角兵衛と云身自今六月廿

四日東見軍と將と云歳身一切の事疎

不為と申共之曰く不意改定分衣と云

と云の味者留と云と云と云奥中兵

河得實と云獲其と云実力と申る也故

切。切。之。豫。算。第。七。大。根。出。本。終。一。何。事。也。
議。層。用。所。テ。ナ。ケ。ル。期。有。不。定。

且。責。族。院。上。奏。不。信。任。出。本。續。也。

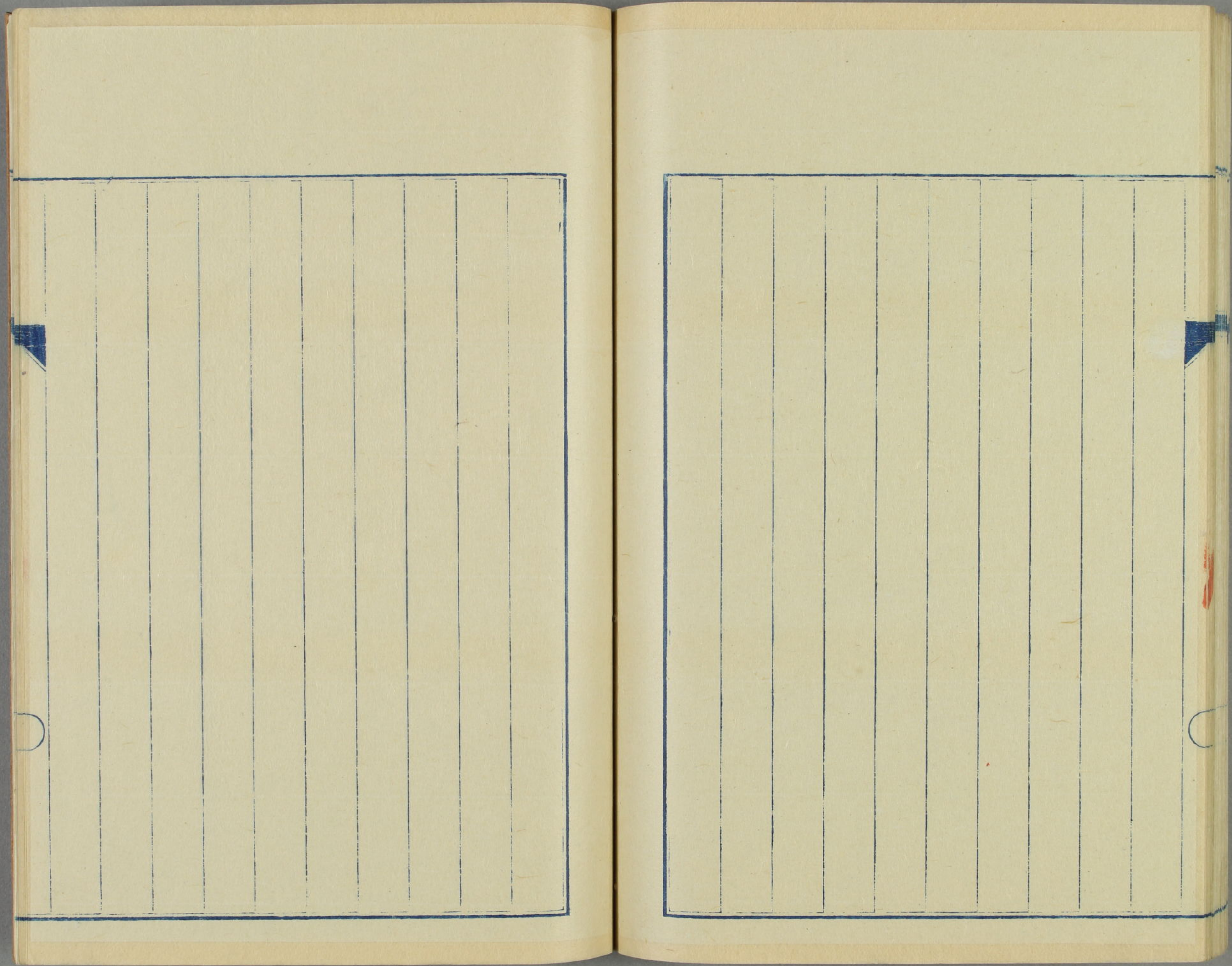
上。奏。之。意。見。者。必。一。國。目。也。也。

前。所。早。き。不。物。也。時。中。到。本。也。也。也。

古。事。也。

清。治。之。後。也。疑。心。弱。冠。也。也。一。伊。奴。波。摩。也。也。

不。可。也。



以下
9丁
白紙

三十年八月業功
田翁 張麻象記

田山黃村

三十年 抄本

田翁 張麻象記

友人張麻象記

錦細 秋成
未耕 田昌 純

戸田哉川村正平

伊東方成

初一等 形制師

同本黄石 全道

從四位 九國莞町

元里内家 加藤重臣

正七位 萩原社

錦糸 後藤

美祿院 渡辺 田子 白根 中一 非高内 藤分 中野 住明

全沙目

大内 上 事 下 黄

同是行 方 政

神田 寿 平

德川 萬 敏

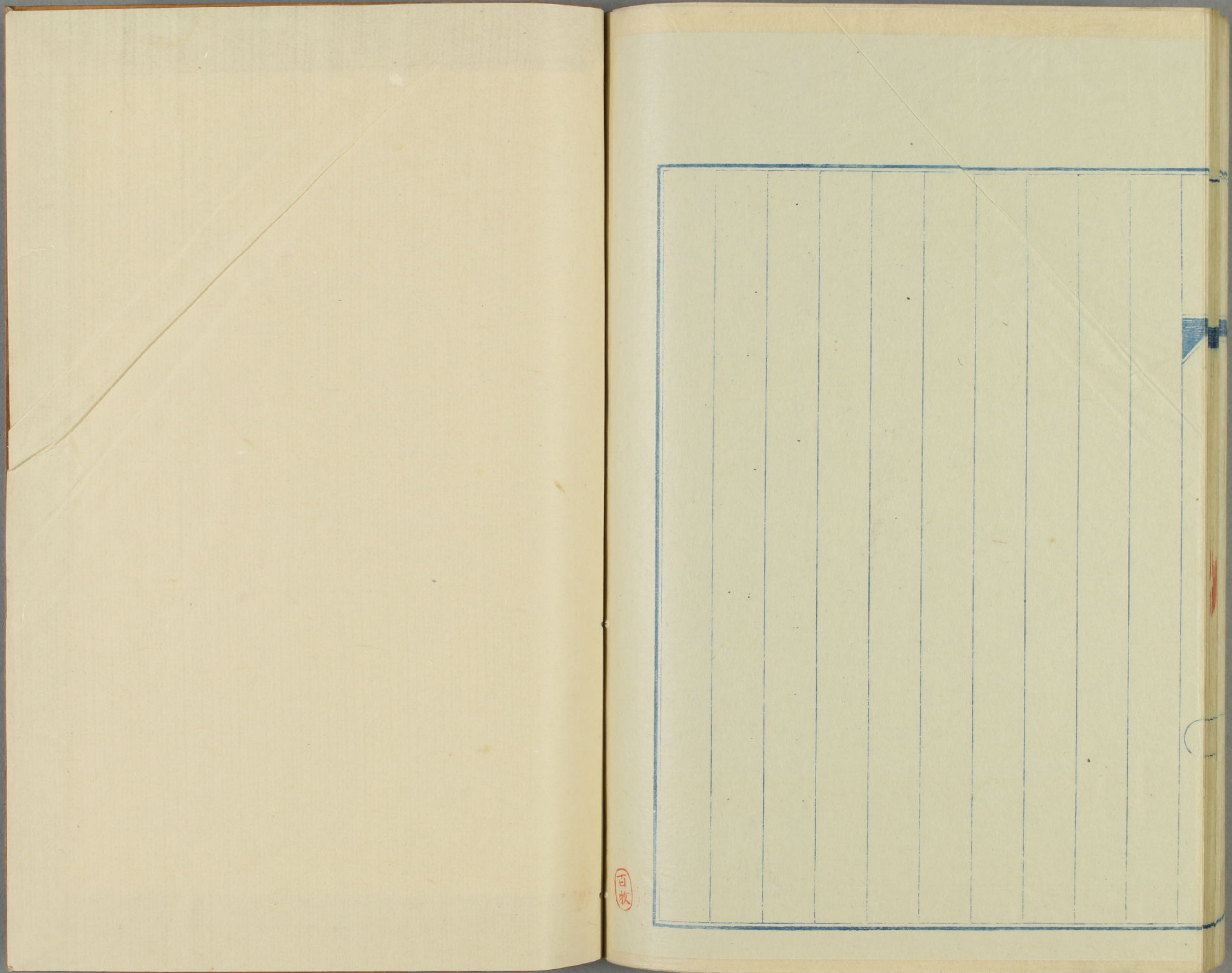
新田 年 内 母 稻葉 正 邦

高橋 建 三

菅原 百 龍

和氣清磨公の別格官幣大士に於て國家不始
大祭有るに身世及り御祭典に御替同不仕後
也洲治世身四月九日 在島城一節

和氣會出張河御中



百牧

